科学的思考の基盤　人間と生活　社会の理解

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
自然科学概論	小原　正 他	□	2単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
医療にたずさわるには、科学的なものの考え方や基本的な科学知識を身につけておくことが必要である。この科目では科学の基礎を学習するために、高校理科の重要なところを再学習する。また、理学療法において必要な物理学・化学・生物学の基礎を学び、幅広い科学的知識を身につけ高い見識を培う。	1年次	前期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
理科の基礎（物理・化学・生物）を理解できる。 幅広い基礎知識を身につけ、科学的なものの見方ができるようになる。	電卓を持参すること

【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
パワーポイント、資料等を中心に講義形式で授業を進める。	高校の物理学・生物学・化学を復習しておくこと

【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
定期試験及び課題、出席及び授業へ取り組む姿勢を総合的に評価する。 定期試験（課題含）90% 出席及び授業へ取り組む姿勢 10%	適宜資料を配布する

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容	担当教員
1	物理の基礎；力とモーメント	小原　正
2	物理の基礎；変位と速度・重心と安定	〃
3	物理の基礎；物体の運動	〃
4	物理の基礎；仕事とエネルギー	〃
5	物理の基礎；流体力学	〃
6	物理の基礎；熱力学と光学	〃
7	物理の基礎；電気と磁気	〃
8	生物の基礎；細胞の構造と機能	吉澤　利夫
9	生物の基礎；細胞膜のはたらき	〃
10	生物の基礎；からだの恒常性の維持（神経系とその働き）	〃
11	生物の基礎；外的刺激の受容（感覚器とその働き）	〃
12	化学の基礎；物質の状態	木島隆
13	化学の基礎；化学結合	〃
14	化学の基礎；化学平衡	〃
15	まとめ　定期試験	〃

科学的思考の基盤　人間と生活　社会の理解

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
統計学	藤堂　庫治	□	2単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
医療福祉系のための統計学の基礎を学び、研究・レポート作成に必要なデータ処理や統計分析を習得することを目的とする。 代表的な統計学的手法については、データを収集してPCで統計処理を体験する。 調べ学習とデータ取りおよび検定の結果をレポートにして提出する。	1年次	後期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
変数・尺度の型に応じてデータ処理方法を適切に使い分けることができる。 度数分布から正規性とばらつきを説明することができる。 パラメトリック検定とノンパラメトリック検定を適切に使い分けることができる。 ただしい統計テストを選択することができる。	できる限り、Excelがインストールされた個人PCで受講してください。 この条件を満たす環境がない学生は、学校のPCで授業する。
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
①座学で理解する ②PCで統計処理してレポートに仕上げる ③確認テストで理解度を自己評価する	授業時間内に終了できなかった課題は、次の講義までに遂行してください。
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
確認テスト　40% レポート　40% 出席及び授業へ取組む姿勢　20%	「みんなの医療統計 12日間で基礎理論とEZRを完全マスター!」　講談社 できる限り、Excelがインストールされた個人PCで受講してください。

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容
1	基本統計量
2	サンプルの収集
3	仮説検定、正規性の検定、等分散性の検定、統計テストの選び方
4	2群間の比較検定（ステューデントのT検定、マンホイットニーのU検定）
5	2群間の比較検定（対応のあるT検定、ウィルコクソンの符号付順位和検定）
6	他群間の比較検定（分散分析など）、交互作用、多重比較検定
7	PCで2群間の比較検定を体験する
8	PCで2群間の比較検定を体験する、確認テスト（第1回～第8回）
9	線形回帰と相関係数
10	PCで相関係数を体験する
11	カイ2乗検定、Fisher直接確率統計法
12	PCでカイ2乗検定、Fisher直接確率統計法を体験する
13	感度、特異度、リスク比とオッズ比
14	PCで感度、特異度、リスク比とオッズ比を体験する
15	確認テスト（第9回～第14回）・課題提出

科学的思考の基盤　人間と生活　社会の理解

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
基礎学習論	小野　佳子	□	2単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
理学療法の専門科目を学習する上で有用な基礎学力の向上を目指し、医学や理学療法の知識の理解に役立てる。 医療現場で働くためには、各種コミュニケーションの力が求められる。特に自分の考えを相手に伝えることは重要であり、「読む」「聞く」「話す」「書く」という表現法の基礎を身につける。また社会人として必要不可欠な漢字力・計算力や一般常識・教養を学び、思考する力を身につける。	1年次	前期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義・演習	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
基本的な学習方法を身につけ、今後の学習に役立てることができる。 社会人として基本的な聞き方、話し方、読み方、書き方ができ、実践することができる。 計算の基本を理解し、表やグラフの読み方が理解できる。	

【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
配布資料、パワーポイント等を使って講義する。適宜、演習等も取り入れる。 「計算練習」「漢字練習」「書き取り練習」「要約練習」等を行う。	幅広い知識・教養を身につけるため、新聞を読むこと。入学前学習課題を使用します。文章作成等、宿題を課すこともあります。

【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
出席状況10% 受講状況40% 課題作成状況50%	参考書 「医療の接遇」医療タイムス 「正しい日本語の使い方」椙出版社

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

コマ数	授業内容
1	オリエンテーション、日本語の力をつける
2	日本語力；語句の正しい表記、漢字テスト、読解力テスト1
3	日本語力；漢字の復習、文法の確認、一般常識の確認
4	日本語力；読解力（文章を解釈する）（要約する）
5	日本語力；慣用句の意味
6	日本語力；敬語・謙譲語・丁寧語を正しく使う
7	日本語力；文章表現の基礎　句読点、文末表現、各用紙の使い方
8	日本語力；文章表現の基礎　分かりやすい文章を作る
9	日本語力；原稿用紙の使い方
10	日本語力；読解力テスト2、「○○について」ここまでのまとめ
11	日本語力；発表・スピーチ
12	仕事に関わる計算；計算の基本ルール
13	仕事に関わる計算；数値と単位、比と割合、データと平均　等
14	仕事に関わる計算；表・グラフ等の読み取り方（代謝・力学・呼吸・循環）
15	まとめ　これからの学習計画について

科学的思考の基盤　人間と生活　社会の理解

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
保健体育	松田　正巳	□	1単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
健康で活力に満ち充実した生活を送るために、スポーツの必要性や安全面を理解し実践に活かせる態度を養成することや、生活・健康に関わる興味や関心を高める。また様々なスポーツ種目の実践を通し、スポーツの楽しさを感じたり、クラスメートとの親睦を図れることを目指す。	1年次	前期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義・実技	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
社会環境と健康の関係性を理解する。 健康と体力についての定義、安全管理の重要性について理解する。 自身の健康管理と体力向上に取り組む。	実技が中心になるため運動ができる服装で参加すること。
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
講義も取り入れながら、実技を中心に進める。実技ではグループを作りグループ対抗でのスポーツを行う。	日頃より健康管理に関する情報に関心を持ち、適度な運動を心掛ける。
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
出席及び授業へ取り組む姿勢を総合的に評価する。	特になし

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

コマ数	授業内容
1	健康の概念；健康とは何か、健康と社会・環境について、安全管理
2	障がい・スポーツ活動と社会　；障がい者のスポーツの捉え方
3	障がい・スポーツ活動と社会　；障がい者のスポーツの意義・理念
4	種目別実技：各障がいのスポーツ指導上の留意点と工夫
5	種目別実技：各障がいのスポーツ指導上の留意点と工夫
6	種目別実技
7	種目別実技
8	種目別実技
9	種目別実技
10	種目別実技
11	種目別実技
12	種目別実技
13	種目別実技
14	種目別実技
15	種目別実技

科学的思考の基盤　人間と生活　社会の理解

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
医学英語	藤堂　庫治 他	□	2単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
一般的な英語力の向上と医療従事者として必要な英語の知識を身につける。一般的な英語力の向上と伴に、臨床実習や臨床に出た際に実践できるような基礎力養う。更に応用として、医療・リハビリテーション分野の文献やインターネットから最先端の情報や知識を得る読解力を養えるようにする。	1年次	前期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
基本的な医学英会話ができる 日本語の意味を理解した上で英単語を覚えることができる 医学英語論文の基礎が分かる	日本語の意味を知って英単語を覚えること。 英語の発音の基礎を覚え、国家試験でも英単語に対応できるようにすること。 積極的に楽しむこと。
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
教科書と配布資料を用いて、講義する。 日本語の意味を理解しながら英単語を覚える。 肢位や姿勢、運動は身体を動かしながら授業を進める。	次回の授業範囲を予習する。
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
定期試験90% 出席及び授業へ取組む姿勢10%	「リハビリテーションの基礎英語」　ﾒｼﾞｶﾙﾋﾞｭｰ社 「基礎運動学」医歯薬出版

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容	担当教員
1	Communication①　Introducing yourself　myself　自己紹介	百瀬　優規
2	Communication②　医療現場での英会話	〃
3	医学英語①　medical professional　医療専門職	藤堂　庫治
4	医学英語②　plane and direction　運動方向と断面	〃
5	医学英語③　movement　運動	〃
6	医学英語④　position　肢位・姿勢・主要関節	〃
7	医学英語⑤　parts of the body　体の部位（骨格）	〃
8	医学英語⑦　parts of the body　体の部位（筋肉）	〃
9	医学英語⑥　parts of the body　体の部位（神経）	百瀬　優規
10	医学英語⑧　inner organ　内臓	〃
11	医学英語⑨　disease　疾患と理学療法　その1	〃
12	医学英語⑩　disease　疾患と理学療法　その2	〃
13	Reading① reading the report①　英語文献の読み方	藤堂　庫治
14	Reading② reading the report②　英語文献を読んでみよう	〃
15	定期試験・まとめ	〃

科学的思考の基盤　人間と生活　社会の理解

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
情報科学	藤堂庫治 他	□	1単位 / 15時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
現代社会において、コンピューターの利用は欠かせない。その為、そうした情報端末の使用方法やOffice系ソフトの基本的使用について課題を交えながら学ぶ。コンピューターを適切に活用する能力やインターネットを利用した情報収集の方法、また、情報管理の方法、個人情報やセキュリティに関しての基本的な知識・能力を、実際に情報端末（タブレット・コンピューター等）を操作することにより習得する。	1年次	前期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義・演習	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
インターネットの基本的な利用方法を身につける。 情報端末の基本的な操作方法が理解でき使用する事ができる。 Microsoft Officeを使用してレポートやプレゼンテーションを作成できる。	積極的にコンピューターを使用して習得すること。
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
コンピューターを操作しながら使用方法や注意点を学ぶ。 Microsoft Officeに関するレポートは、第8回終了時に提出する。	身につけたスキルを日常的に、または他の科目におけるレポート等の作成に反映させるなど、知識・技術を高めて下さい。
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
レポート提出70% 受講態度、出欠30%	Microsoft Officeがインストールされた個人PCを持参することが望ましい。 所有していない場合は、学校のPCで授業する。

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

コマ数	授業内容	担当教員
1	情報管理；知り得た情報の発信、記録、保存や情報漏洩などのリスク管理	宮澤　優一
2	ネット利用に関する基本知識；著作権法などインターネット利用の際の法律	〃
3	Office Excel	藤堂庫治
4	〃	〃
5	〃	〃
6	Office PowerPoint	〃
7	Office Word	〃
8	Office PowerPointの動画作成	〃

科学的思考の基盤　人間と生活　社会の理解

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】		【単位数/授業時数】
ボランティア論	青柳省吾 他	□		2単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
ボランティア活動を行う上で基礎となるボランティア活動の基本概念・歴史・社会的意義などの基礎的な知識を学び、実施するために必要な知識を習得する。ボランティア活動は新たな出会いや発見の場でもあり、自己開発やさまざまな能力を開発する機会でもある。ボランティア活動の体験を通して、活動の領域・形態や活動動機の多様性を知り、自己との接点を見いだし、ボランティア活動のあり方を学習する。	1年次	前期・後期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義・演習	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
ボランティア活動の歴史や役割等を理解することができる。 実際にボランティア活動に関わり経験した中から、ボランティアとは何かを考えることができるようになる。 ボランティアの意義や社会の中での役割、事例紹介等を通じ、自分の考え方を構築し「自分たちができること」についてヒントを得て行動に移すきっかけを見つける。	グループワークやボランティア活動には積極的に参加し、「主体性」を育む努力をすること。また他者とのコミュニケーションを大切にすること。 積極的にグループ活動に参加すること。
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
配布資料、パワーポイント等を使って講義を進める。 グループワークによる演習を行う。	身の周りのボランティア活動や新聞・メディアなどの情報に目を向けるようにすること。
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
受講態度　40% 課題レポート　60%	教科書：特になし（授業時資料配布）

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容
1	オリエンテーション；ボランティア活動とは何か
2	ボランティアの基礎の理解
3	各分野のボランティア；地域・国際社会のボランティア
4	各分野のボランティア；環境と災害ボランティア
5	各分野のボランティア；スポーツとインクルーシブと指導者に求められる資質
6	現代社会におけるボランティアの調査・企画準備
7	ボランティアの企画書作成　発表準備
8	ボランティア企画の発表
9	地域ボランティアの調査・企画書作成
10	地域ボランティアの実践準備①
11	地域ボランティアの実践準備②
12	地域ボランティアの実践①
13	地域ボランティアの実践②
14	地域ボランティアの企画・実践　まとめ①
15	地域ボランティアの企画・実践　まとめ②

科学的思考の基盤　人間と生活　社会の理解

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
コミュニケーション論Ⅰ	小野　佳子	□	1単位 / 15時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
社会人としてあらゆる場面で通用する高度で幅広いコミュニケーション能力を習得することを目的とする。コミュニケーション論の概念、理論を理解し、将来的には医療の場で効果的、かつ適切なコミュニケーション行動を展開できるような学びとする。また、正しい文章表現ができるような練習・実践も行っていく。	1年次	前期・後期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義・演習	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
他者の意見を傾聴し、自分の意見も適切に述べるなど、良好な人間関係作りに役立てることができる。 正しい日本語や丁寧語、敬語の使用について意識できるようになる。 理学療法士を目指す学生としての態度能力を身に付ける。	ﾏﾅｰは、実社会で実践してこそ初めて役立ちます。授業中だけでなく、普段から礼儀正しい行動をするように心がけましょう。 グループワークに積極的に取り組みましょう。
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
配布資料、パワーポイント等を使って講義する。グループ活動や演習も行う。必ず全員が1分30秒スピーチを1回以上経験する。	日頃から接遇の心を意識して、他者と良好なコミュニケーションを取るようにしましょう。
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
出席状況　10% 受講態度　70% 医療面接実技　20%	教科書　特になし 参考書　「医療の接遇」医療タイムス 「ビジネスマナーの基本」新星出版社

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容
1	はじめに コミュニケーションの基礎、理学療法士を目指すこと
2	他者を理解する方法の実践
3	自分の理解（自己管理、意思決定スタイル）
4	基礎実習に向けての心構え・準備 接遇、挨拶、丁寧語、自己紹介、報告、傾聴
5	基礎的コミュニケーション技術（自分のことを表現する　90秒スピーチ）
6	基礎的コミュニケーション技術（見学実習に向けて、電話、お礼状の書き方）
7	医療面接、傾聴、例題について練習
8	医療面接、傾聴、実技テスト

科学的思考の基盤　人間と生活　社会の理解

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
コミュニケーション論Ⅱ	小野　佳子	□	1単位 / 15時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
社会に出てから上司や先輩、同僚などと円滑な意思伝達が行えるよう、基本的なビジネスマナーを通して『コミュニケーション力』を身に付ける事を目的とする。マナーや言葉遣いの演習を通じ、より良い人間関係の構築に欠かすことのできないコミュニケーション力の向上を目指す。併せて、自己表現の重要性を認識し、就職面接や卒業後の実社会で、自信を持って発言し行動できる人材となることを目指す。 また採用試験に向けての心構え、面接、作文の書き方などの講義・演習等も行う。	３年次	前期・後期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義・演習	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
社会人としての態度能力を身に付け、学校生活のみならず臨床実習や就職活動においても意識して実践できる。 履歴書作成や面接等、具体的な就職試験をイメージすることができるようになる。	身だしなみを整え、社会人としての態度を意識して受講してください。

【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
配布資料、パワーポイント、動画等を使用して講義を進める。グループワークや面接練習などの実践も行う。	履歴書作成指導は個別にも実施します。5月16日までに必ず作成し提出し添削を受けてください。採用試験前の面接練習は必ず受けてください。

【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
受講態度　80% 履歴書作成　10% 面接練習　10%	参考書　「ビジネスマナーの基本」新星出版社

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容	担当教員
1	就職活動の基本、社会人の心得・マナー、自己表現	小野　佳子
2	履歴書の書き方、面接準備	〃
3	ハローワークの活用の仕方	ハローワーク
4	自分の理解（自分の長所、ポジティブフィードバック）	小野　佳子
5	面接について、面接練習	〃
6	面接練習	〃
7	新社会人ワーキングセミナー	労政事務所
8	新社会人としての心得、まとめ	小野　佳子

人体の構造と機能及び心身の発達

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】		【単位数/授業時数】
運動機能解剖学	加藤　正裕　他	□		2単位 / 60時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
理学療法学は人体を対象とした実践的学問で、人体の構造と機能を理解しておく必要性が求められる。そのため正常な人体の構造と機能について系統的に学習する。得られた知識は、生理学、運動学、臨床医学へとつながる。 本講義では、理学療法と関わりの深い運動器系（骨格系・筋系）を中心に学習し、その構造と機能を修得する。	1年次	前期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義・演習	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
人体の概要と解剖学的用語を理解する。 人体の構成について全体像を理解することができる。 骨・関節・筋の名称、位置、形態・構造、作用・機能を説明することができる。	骨模型を用いた授業では、積極的に参加し触れてみること。

【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
パワーポイントと配布資料を用いて、講義中心に進める。 筋骨格系の授業では、骨模型を用いながらグループでの実習も行う。	覚える事項が多いため、復習を中心に進めることが望ましい。

【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
小テスト、中間試験及び期末試験、出席及び授業へ取り組む姿勢を総合的に評価する。 小テスト5%　中間試験①　30%、中間試験②30%　期末試験　30% 出席及び授業へ取り組む姿勢　5%	「標準理学療法学・作業療法学　解剖学」医学書院、「ネッター解剖学アトラス」南江堂

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容	担当教員
1	解剖学総論；人体の構成、運動器に必要な解剖学用語	加藤　正裕
2	骨学総論；骨・関節の構造と機能	〃
3		〃
4		〃
5	筋学総論；筋の基本構造と機能	〃
6		〃
7		〃
8	神経学総論；神経系の構成、神経組織、末梢神経系総論	〃
9		〃
10		〃
11	まとめ	〃
12	中間テスト①	〃
13	骨模型実習　オリエンテーション　①上肢帯（鎖骨・肩甲骨）	藤堂庫治・塩澤　崇
14	②自由上肢骨（上腕骨・橈骨・尺骨）	〃
15	③自由上肢骨（手根骨・中手骨・指節骨）と胸郭（胸骨・肋骨）	〃
16	④椎骨と脊柱（頚椎・胸椎・腰椎・仙椎・尾椎）	〃
17	⑤下肢帯と骨盤（寛骨・仙骨・骨盤）	〃
18	⑥自由下肢骨（大腿骨・膝蓋骨・脛骨・腓骨）	〃
19	⑦自由下肢骨（足根骨・中足骨・指節骨）	〃
20	⑧頭蓋概観・脳頭蓋の各部　⑨顔面頭蓋の各部	〃
21	骨　中間テスト②	〃
22	筋実習　オリエンテーション　①胸部の筋　上肢の屈筋群	〃
23	②背部の筋　上肢の伸筋群	〃
24	③前腕の屈筋群	〃
25	④前腕の伸筋群	〃
26	⑤内寛骨筋群　外寛骨筋群	〃
27	⑥大腿の伸筋群　内転筋群	〃
28	⑦大腿の屈筋　下腿の屈筋	〃
29	⑧下腿の伸筋　腓骨筋	〃
30	筋　期末テスト	〃

人体の構造と機能及び心身の発達

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
解剖学	加藤　正裕　他	□	2単位 / 60時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
理学療法学は人体を対象とした実践的学問で、人体の構造と機能を理解しておく必要性が求められる。そのため正常な人体の構造と機能について系統的に学習する。得られた知識は、生理学、運動学、臨床医学へとつながる。 解剖学Ⅱでは内臓器系・神経系の正常な形態と構造を理解し、各臓器のそれぞれの名称、働きなどについて学習する。	1年次	後期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
人体の構成について各系統（器官系）の全体像を理解することができる。 内臓器系・神経系の正常な構造・働きについて理解し説明することができる。	グループ学習・調べ学習を中心に行うため協力が必要となる。協調的な態度で臨むことが良い。
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
パワーポントと配布資料を用いて講義を中心に解説・説明をする。神経系は予習課題を渡し、それに沿った講義・グループ学習・調べ学習を展開し最後に確認テストを行う	覚える事項が多いため、復習を中心に進めることが望ましい。予習課題を渡すため必ず行って講義に臨むこと。
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
定期試験及び課題、出席及び授業へ取り組む姿勢を総合的に評価する。 中間試験　45%、　定期試験　45% 出席及び授業へ取り組む姿勢　10%	「標準理学療法学・作業療法学　解剖学」医学書院、「ネッター解剖学アトラス」南江堂

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容	担当教員
1	循環器系の解剖；心臓について	加藤　正裕
2		〃
3	脈管系の解剖；動脈系・静脈系・リンパ系について	〃
4		〃
5	内臓学；内臓器官の基本構造、 消化器系の解剖；口腔から大腸、肝臓、胆嚢、膵臓等について	〃
6		〃
7		〃
8	呼吸器系の解剖；鼻、咽頭、気管、気管支、肺等について	〃
9		〃
10	泌尿器系の解剖；腎臓、尿管、膀胱、尿道について	〃
11	生殖器系の解剖；男性および女性生殖器について	〃
12	内分泌系の解剖；内分泌系の構造と機能について	〃
13	感覚器系の解剖；外皮・味覚・平衡感覚・視覚器等について	〃
14		〃
15	まとめ	〃
16	中間試験	〃
17	神経系総論；神経系の構成、発生	小野佳子
18		〃
19	中枢神経系；脊髄	藤堂庫治
20	中枢神経系；脳幹	青柳省吾
21	中枢神経系；大脳	木島　隆
22		〃
23	中枢神経系；小脳	〃
24	末梢神経系；脊髄神経	塩澤　崇
25		〃
26	末梢神経系；脳神経	青柳省吾
27		〃
28	末梢神経系；自律神経	藤堂庫治
29	神経路	〃
30	期末試験・まとめ	〃

人体の構造と機能及び心身の発達

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】		【単位数/授業時数】
体表解剖学	吉澤利夫　他	□		1単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
理学療法における検査・測定および治療を実施するにあたり、体表から骨・関節・筋・腱等を確認して身体組織の触診を行えることは必要不可欠な技術である。 各組織の名称、筋の走行など基本的解剖学の確認を行うとともに、体表に現れた指標の観察、体表面からの触診の技術を学修する。	1年次	前期
	【授業形態】	【履修区分】
	演習	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
身体の各組織、器官の名称と機能、触診が可能な部位を説明することができる。 体表から骨・関節・筋・腱を正しく触診することができる。 理学療法における視診・触診の目的を捉えたうえで実施できる。	直接皮膚に触れるため、可能な限り脱衣しやすく、動きやすい服装を準備する。
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
講義を行いながら、実技演習を中心に進める。 学生同士が被検者となり視診・触診を実践する。	運動機能解剖学で学んだ骨・関節・筋等の名称を復習しておくこと。
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
出席及び授業へ取り組む姿勢20% 実技試験80%	「標準理学療法学・作業療法学　解剖学」医学書院 「ネッター解剖学アトラス」南江堂 「徒手筋力検査法」　協同医書

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容
1	オリエンテーション；各組織の触診方法
2	骨指標の触診；頭頸部、体幹①
3	骨指標の触診；頭頸部、体幹②
4	軟部組織の触診；頭頸部、体幹
5	骨指標の触診；上肢
6	軟部組織の触診；上肢帯
7	軟部組織の触診；上肢①
8	軟部組織の触診；上肢②
9	骨指標の触診；下肢
10	軟部組織の触診；下肢帯
11	軟部組織の触診；下肢①
12	軟部組織の触診；下肢②
13	骨・軟部組織の触診　総まとめ
14	骨・軟部組織の触診　総まとめ
15	実技試験

人体の構造と機能及び心身の発達

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
解剖学演習	青柳省吾　他	□	1単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
解剖学の知識をもとに、骨標本や人体各部の標本・模型を用いて人体の構造を立体的に把握し、それらの機能を理解していくことで、専門分野の学習を進める上で十分な基礎知識を獲得する。 循環系、内臓系の構造・作用、血管支配等を立体的に理解する。 神経系に関しては解剖学・生理学の知識を統合し、自律神経系の機能、神経の走行、脳解剖・伝導路について理解する。	1年次	後期
	【授業形態】	【履修区分】
	演習	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
人体の構造を部位ごとに理解し、各器官の名称、位置、形状を正しく述べることができる。循環系について、心臓の構造と機能、主要な血管とその分枝の名称、走行、分布域について述べることができる。内臓諸器官については脈管系、消化器系、呼吸器系、泌尿器系、内分泌系について構造と機能を関連づけて述べることができる。	グループ学習が中心となるため、積極的に授業に参加すること。
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
演習を中心に行う。 模型等を用いながら、演習はグループで行う。	解剖学で学んだ内臓系・神経系の分野の復習を行うこと。
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
定期試験及び課題、出席及び授業へ取り組む姿勢を総合的に評価する。 定期試験 80% 出席及び授業へ取り組む姿勢 20%	「標準理学療法学・作業療法学　解剖学」医学書院 「ネッター解剖学アトラス」南江堂 「シンプル生理学」　南江堂

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

コマ数		授業内容
1	内臓系	循環器系：心臓
2		脈管系
3		消化器系
4		呼吸器系
5		泌尿器系
6		内分泌系
7	脳・神経系	感覚器系（嗅覚・視覚）
8		感覚器系（皮膚感覚・聴覚、平衡感覚）
9		神経系の理解（運動・感覚神経の走行）
10		自律神経系の理解
11		下肢末梢神経の走行（腕神経叢・腰神経叢）
12		中枢神経について（脳解剖）
13		中枢神経について（伝導路）
14		筋収縮の仕組みについて
15	定期試験・まとめ	

人体の構造と機能及び心身の発達

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
基礎解剖生理学Ⅰ	吉澤　利夫　他	□	1単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
生理学Ⅰで学習する内容を基に、解剖学と生理学とを関連付けながら、リハビリテーションを実践する際に必要となる知識を重点的に学習し、理解を深める。ここでの理解は、疾病・病態等を学ぶ上での重要な基礎となり、医療に携わる者の常識としても必須である。 人体を構成する各器官の基本的な構造と主な働き（機能）を理解し、基礎医学や理学療法学への学習へ結びつけることが目的である。	1年次	前期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義・演習	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
人体を構成する組織・臓器について構造と機能を理解し、説明することができる。 人体に関する知識を他の専門科目の学習に活用できる。	

【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
パワーポイントと資料を用いて講義を進める。 適宜、調べ学習を個人またはグループワークにて行う。	授業毎の予習・復習を必ず行うこと。

【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
定期試験、出席及び授業へ取組む姿勢を総合的に評価する。 定期試験90% 出席及び授業へ取組む姿勢10%	「標準理学療法学・作業療法学　解剖学」医学書院 「ﾌﾟﾛﾒﾃｳｽ解剖学ｱﾄﾗｽ　解剖学総論/運動器系」医学書院 「シンプル生理学」　南江堂

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容	
1	組織・細胞の基礎	吉澤利夫
2	神経系の構造と機能①	〃
3	神経系の構造と機能②	〃
4	神経系の構造と機能③	〃
5	神経系の構造と機能④	〃
6	筋骨格系の構造と機能①	〃
7	筋骨格系の構造と機能②	〃
8	筋骨格系の構造と機能③	〃
9	感覚器系の構造と機能①	青柳省吾
10	感覚器系の構造と機能②	〃
11	感覚器系の構造と機能③	〃
12	運動器系の構造と機能①	塩澤　崇
13	運動器系の構造と機能②	〃
14	運動器系の構造と機能③	〃
15	定期試験　まとめ	〃

人体の構造と機能及び心身の発達

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
基礎解剖生理学Ⅱ	吉澤　利夫	□	1単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
生理学Ⅱで学習する内容を基に、解剖学と生理学とを関連付けながら、リハビリテーションを実践する際に必要となる知識を重点的に学習し、理解を深める。ここでの理解は、疾病・病態等を学ぶ上での重要な基礎となり、医療に携わる者の常識としても必須である。 人体を構成する各器官の基本的な構造と主な働き（機能）を理解し、基礎医学や理学療法学への学習へ結びつけることが目的である。	1年次	後期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義・演習	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
人体を構成する組織・臓器について構造と機能を理解し、説明することができる。 人体に関する知識を他の専門科目の学習に活用できる。	

【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
パワーポイントと資料を用いて講義を進める。 適宜、調べ学習を個人またはグループワークにて行う。	授業毎の予習・復習を必ず行うこと。

【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
	「標準理学療法学・作業療法学　解剖学」医学書院 「ﾌﾟﾛﾒﾃｳｽ解剖学ｱﾄﾗｽ　解剖学総論/運動器系」医学書院 「シンプル生理学」　南江堂

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容
1	血液・循環器系の構造と機能①
2	血液・循環器系の構造と機能②
3	血液・循環器系の構造と機能③
4	呼吸器系の構造と機能①
5	呼吸器系の構造と機能②
6	呼吸器系の構造と機能③
7	内分泌系の構造と機能①
8	内分泌系の構造と機能②
9	消化・吸収①
10	消化・吸収②
11	泌尿器系の構造と機能①
12	泌尿器系の構造と機能②
13	体液と体液平衡
14	栄養と代謝
15	定期試験　まとめ

人体の構造と機能及び心身の発達

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
生理学Ⅰ	能勢　博	□	1単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
生理学は生命現象の仕組みや意義について、統合的に解明する生命科学である。また、専門基礎分野の根幹を成す重要な教科であり、他の教科の礎ともなる。生命活動に欠かせない人体機能維持システムや細胞生理、神経生理学や器官・臓器の生理学に至るまで、学習範囲は広い。生理学Ⅰでは、人の運動、行動を制御する神経、筋運動、感覚等の機能について学ぶ。人体の正常な生理学を修得することによって、後に学ぶ内科学や理学療法などの専門科目が理解できるようにすることが目標である。	1年次	前期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
医学用語の意味を理解しながら教科書の文章を読み解くことができる。身体各器官のはたらきを理解することができる。	

【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
板書、パワーポイント、資料を用いて講義を進める。 筆記用具を準備すること。	学習した内容がすべての分野につながるため、復習を繰り返し行うこと。

【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
定期試験、出席及び授業へ取組む姿勢を総合的に評価する。 定期試験90% 出席及び授業へ取組む姿勢10%	「シンプル生理学」　南江堂

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容
1	生理学概論
2	神経細胞の基礎機能
3	骨格筋
4	筋収縮のエネルギー源
5	感覚系
6	反射と反射弓
7	視覚
8	聴覚
9	平衡感覚
10	嗅覚・味覚
11	脳神経
12	脳
13	運動の調節
14	自律神経系
15	定期試験　まとめ

人体の構造と機能及び心身の発達

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
生理学Ⅱ	中澤　功　他	□	1単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
生理学は生命現象の仕組みや意義について、統合的に解明する生命科学である。また、専門基礎分野の根幹を成す重要な教科であり、他の教科の礎ともなる。生命活動に欠かせない人体機能維持システムや細胞生理、神経生理学や器官・臓器の生理学に至るまで、学習範囲は広い。生理学Ⅱでは、循環、呼吸、消化、内分泌、排泄の所器官の働きについて学ぶ。人体の正常な生理学を修得することによって、後に学ぶ内科学や理学療法などの専門科目が理解できるようにすることが目標である。	1年次	後期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
医学用語の意味を理解しながら教科書の文章を読み解くことができる。身体各器官のはたらきを理解することができる。	

【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
講義を中心に進めていく。 調べ学習等を行うこともある。	学習した内容がすべての分野につながるため、復習を繰り返し行うこと。

【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
定期試験、出席及び授業へ取組む姿勢を総合的に評価する。 定期試験90% 出席及び授業へ取組む姿勢10%	「シンプル生理学」　南江堂

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容	
1	循環①；　循環器系の基本構造、心臓の構造と機能	中澤　功
2	循環②；　心臓の自動性、心筋の特性、心電図	吉澤　利夫
3	循環③；　血圧と循環調節（ホルモン性調節、神経性調節）	吉澤　利夫
4	呼吸①；　呼吸器の構造と機能、呼吸運動の基本	中澤　功
5	呼吸②；　肺気量分画、ガス交換の機序	吉澤　利夫
6	血液	中澤　功
7	内分泌系①；　ホルモンの一般的性質	中澤　功
8	内分泌系②；　各ホルモンの特性・機能	吉澤　利夫
9	消化・吸収①；　消化管の運動と分泌機能	中澤　功
10	消化・吸収②；　消化管の消化と吸収機能	吉澤　利夫
11	性と生殖機能	吉澤　利夫
12	腎臓と排泄；　尿の生成と排泄	中澤　功
13	酸-塩基平衡；　体液とその調節	吉澤　利夫
14	栄養と代謝、体温調節	中澤　功
15	定期試験　まとめ	吉澤　利夫

人体の構造と機能及び心身の発達

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】		【単位数/授業時数】
生理学実習	能勢 博　他	□		1単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
各種の生理機能（呼吸・循環・内分泌・筋収縮・神経機能など）をより深く理解するために、健常な人を対象として、グループによる実験を行う。実験の基本的な手技、機器の操作方法、データの収集、実験結果の分析、考察の仕方などを修得し、レポート作成を行う。実験で観察される現象や得られた結果（データ）を、自分の眼で確認し正しく理解する。	1年次	後期
	【授業形態】	【履修区分】
	実験・実技	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
生体への刺激に対する反応を生理学的に理解できること 生理学的な応答を文章にして説明することができること	真剣に積極的に取り組むこと。 班のチームワークを乱さないようにして、主体的に参加すること
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
グループごとに各実習項目の実験を実施し、レポート提出する。	生理学的反応について考察しレポートをまとめるため図書を調べながら復習すると良い。
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
レポート提出、出席及び授業へ取組む姿勢を総合的に評価する。 レポート提出　90% 出席及び授業へ取組む姿勢　10%	「シンプル生理学」　南江堂 「基礎運動学」　医歯薬出版

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容
1	
2	
3	
4	骨格筋機能
5	各種筋力測定
6	循環の生理学
7	心拍数、血圧の生理的変動
8	
9	感覚機能
10	皮膚感覚、深部感覚（感覚点の分布、二点弁別覚）
11	呼吸の生理学
12	スパイログラムの測定
13	
14	
15	

人体の構造と機能及び心身の発達

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
運動学Ⅰ	吉澤利夫　他	☑ 理学療法士として病院において10年以上の臨床経験があり、その経験を基に授業を行う。	1単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
運動学とは、人間の動作のしくみを物理学、解剖学、生理学、神経学、心理学などの基礎知識を用いて分析・研究する学問である。障害を持った人の姿勢や動作を改善することを目的とする理学療法にとって、運動学は直接的な基礎となる学問である。理学療法は、人間を対象とし、人間の基本的な動作のしくみを理解する事が重要である。運動学Ⅰでは、運動学全体を概観し、次に運動学演習へとすすめる。	1年次	前期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
生体力学の基礎が理解できる 骨・筋・靭帯・腱・関節などの構造を理解し説明することができる 身体のエネルギー消費について理解でき、計算ができる 体幹部の構造と運動を理解し説明することができる 起居動作を説明でき、動作の観察する視点を持つ	生理学・解剖学と関連付けながら学ぶと知識の定着に繋がる。
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
パワーポイントと資料を用いて講義形式で進める。実際に骨や筋もその場で触れることも行う。	運動学だけでなく解剖学や生理学の教科書も参考にしながら復習を中心に行うこと。
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
定期試験、出席及び授業へ取り組む姿勢を総合的に評価する。 定期試験90%　　出席及び授業へ取り組む姿勢10%	「基礎運動学」医歯薬出版 「PT・OTのための運動学テキスト」金原出版

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

コマ数	授業内容	担当教員
1	運動学とは	吉澤利夫
2	生体力学の基礎①	〃
3	生体力学の基礎②	〃
4	生体力学の基礎③	〃
5	生体の構造と機能；骨の構造と機能	塩澤　崇
6	生体の構造と機能；関節の構造と機能	〃
7	生体の構造と機能；筋・腱および靭帯・骨格筋の構造と機能	〃
8	生体の構造と機能；骨格筋の構造と機能・筋の働きと筋の代謝機能	〃
9	エネルギー消費、顔面・頭部の運動	吉澤利夫
10	体幹部　；脊柱・骨盤の構造と運動①	〃
11	体幹部　；脊柱・骨盤の構造と運動②	〃
12	運動学習	〃
13	運動学習	〃
14	運動動作の観察（起居動作）	〃
15	定期試験・まとめ	〃

人体の構造と機能及び心身の発達

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
運動学Ⅱ	木島　隆　他	☑ 理学療法士として病院において10年以上の臨床経験があり、その経験を基に授業を行う。	1単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
運動学とは、人間の動作のしくみを物理学、解剖学、生理学、神経学、心理学などの基礎知識を用いて分析・研究する学問である。障害を持った人の姿勢や動作を改善することを目的とする理学療法にとって、運動学は直接的な基礎となる学問である。理学療法は、人間を対象とし、人間の基本的な動作のしくみを理解する事が重要である。運動学Ⅱでは、運動学全体を概観し、次に運動学演習へとすすめる。	1年次	後期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義・実技	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
肩甲帯と肩関節の構造と運動を理解し説明することができる 肘関節と前腕の構造と運動を理解し説明することができる 手関節と手指関節の構造と運動を理解し説明することができる 股関節・膝関節・足関節の構造と運動を理解し説明することができる 正常動作の観察に運動学が必要なことを理解し説明することができる	
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
定期試験、出席及び授業へ取り組む姿勢を総合的に評価する。 定期試験90%　　出席及び授業へ取り組む姿勢10%	「基礎運動学」医歯薬出版 「PT・OTのための運動学テキスト」金原出版

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

コマ数	授業内容	担当教員
1	肩甲帯・肩関節の構造と運動①	塩澤　崇
2	肩甲帯・肩関節の構造と運動②	〃
3	肘関節と前腕の構造と運動①	〃
4	肘関節と前腕の構造と運動②	〃
5	手関節と手指関節の構造と運動①	〃
6	手関節と手指関節の構造と運動②	〃
7	股関節　；股関節の構造と運動①	木島　隆
8	股関節　；股関節の構造と運動②	〃
9	膝関節　；膝関節の構造と運動	〃
10	足関節　；足関節の構造と運動①	〃
11	足関節　；足関節の構造と運動②	〃
12	動作観察と分析；正常運動分析（観察）	〃
13	正常歩行	〃
14	まとめ・補足	〃
15	定期試験・まとめ	〃

人体の構造と機能及び心身の発達

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
運動学演習	木島　隆	☑ 理学療法士として病院において10年以上の臨床経験があり、その経験を基に授業を行う。	1単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
解剖学や生理学などの基礎医学を基盤として、生体運動を物理学の視点からとらえる視点は必須である。このため評価や治療の中核となる運動学は臨床において重要な位置を占める。これらの基礎と臨床をを結びつけるため体表機能解剖学、運動機能解剖学に加え運動学の知識を基に、自身や他者の身体を触れながら演習形式で運動学の概要を学ぶことを目的とする。	1年次	後期
	【授業形態】	【履修区分】
	演習	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
体幹部の運動学を理解し身体を使用しながら説明することができる 肩甲帯・肘・手関節・手指の運動学を理解し身体を使用しながら説明ができる。股関節・膝関節・足関節の運動学を理解し身体を使用しながら説明ができる。歩行を中心とした正常動作の観察に運動学が関与することを理解し動作を行いながら説明することができる	解剖学・運動学と関連付けながら学ぶと知識の定着に繋がる。
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
資料等を中心に概要を説明した後、調べ学習と実際に身体を使いながら演習形式で身体の運動学を学ぶ	運動学だけでなく解剖学や生理学の教科書も参考にしながら復習を中心に行うこと。
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
出席及び授業へ取り組む姿勢を総合的に評価する。また、必要に応じレポート等の課題を課しそれらも総合判定の材料とする。	「基礎運動学」医歯薬出版 「PT・OTのための運動学テキスト」金原出版　「機能解剖学的触新技術」MEDICALVIEW

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

コマ数	授業内容	担当教員
1	体幹部　；脊柱・骨盤の構造と運動①	木島　隆
2	体幹部　；脊柱・骨盤の構造と運動②	〃
3	肩甲帯・肩関節の構造と運動	塩澤　崇
4	肘関節と前腕の構造と運動	〃
5	手関節と手指関節の構造と運動①	〃
6	手関節と手指関節の構造と運動②	〃
7	股関節　；股関節の構造と運動	木島　隆
8	膝関節　；膝関節の構造と運動	〃
9	足関節　；足関節の構造と運動	〃
10	足関節　；足関節の構造と運動	〃
11	正常歩行	〃
12	正常歩行	〃
13	動作観察と分析；正常運動分析（観察）	〃
14	その他の動作（車いす・起き上がり・立ち座り・階段昇降など）	〃
15	まとめ・補足	〃

人体の構造と機能及び心身の発達

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
臨床運動学	木島　隆	☑ 理学療法士として病院において10年以上の臨床経験があり、その経験を基に授業を行う。	1単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
人間の正常な歩行や動き（運動）・動作の基本的メカニズム（基礎運動学）を学習しつつ、異常歩行、異常動作などを運動学的に分析し予防や療法に応用できるように学習する。 運動学の理論については運動学Ⅰ・Ⅱですでに学んでいるが、実際に動作を把握・理解するためには、観察・測定・整理・分析が必要で実習という形で自ら被検者となることにより、客観的に姿勢・動作をとらえる方法を学び、より科学的に動作を考えることができるようにする。	２年次	前期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義・演習	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
動作観察の必要性を理解し、動作観察が行える 観察した動作を分析することができる 分析したことを要約し他者に伝えることができる 分析した要素について意見交換ができる	グループ活動が中心になるため、協力をして行うことが必要である。あらかじめ予定を確認しておくとよい。運動できる服装で講義に参加すること。
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
資料で説明後、グループでの測定・分析・資料の作成・発表を行う。その発表でディスカッションを行い知識と思考の共有を図る。	運動学の知識が非常に重要になるため、運動学分野を予習しておくとよい。
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
定期試験、出席及び授業へ取り組む姿勢を総合的に評価する。 定期試験80%　授業中の発表10%　出席及び授業へ取り組む姿勢10%	動作分析臨床活用講座（Medical View）

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容
1	動作の観察と分析
2	正常歩行・正常動作
3	〃
4	異常歩行・異常動作
5	〃
6	機器の利用；動画を用いた歩行分析
7	〃
8	〃
9	動画を利用した歩行分析の発表
10	機器の利用；アプリケーションを用いた動作分析
11	〃
12	〃
13	アプリケーションを用いた動作分析の発表
14	まとめ
15	定期試験・総括

人体の構造と機能及び心身の発達

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
人間発達学	佐藤　陽子　他	□	1単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
理学療法は新生児から高齢者（老人）まであらゆる年齢層を対象とする。そのため、各発達段階における身体的・心理的・社会的発達の理解が重要となってくる。この講義の中では発達の概念および人間と発達の関連性、人間発達を学ぶ意義重要性について講義を進めていく。 人に対する理解の基礎として、発達過程を知り、その変化と関連性と特徴について考えていく。心理面・運動面ともに臨床においても応用していけることを目標とする。	1年次	後期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
人間発達の一般原理を理解できる 運動機能の発達を説明することができる 心理・社会的発達を説明することができる 知能の発達を説明することができる 遊びの発達を説明することができる	授業での説明を理解すること
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
講義を中心に進めていく。	授業で学んだことを復習すること
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
定期試験、課題、出生状況を総合的に判断する 定期試験80% 課題10% 出席状況10%	「Crosslink Basic　人間発達学」メジカルビュー社

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

コマ数	授業内容	担当教員
1	総論；人間発達学とは・一般原理	石川　智之
2	運動機能の発達；中枢神経系の成熟と運動発達（反射）	〃
3	運動機能の発達；中枢神経系の成熟と運動発達（姿勢反応）	〃
4	運動機能の発達；粗大運動発達①	鈴木　芳則
5	運動機能の発達；粗大運動発達②	〃
6	運動機能の発達；微細運動発達①	佐藤　陽子
7	運動機能の発達；微細運動発達②	〃
8	心理・社会的発達；新生児期・乳児期	〃
9	心理・社会的発達；幼児期	〃
10	心理・社会的発達；学童期・思春期	〃
11	心理・社会的発達；青年後期・成人期	〃
12	心理・社会的発達；老年期	〃
13	知能の発達・言語の発達	〃
14	遊びの発達・情緒の発達	〃
15	定期試験・まとめ	〃

疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
病理学概論	川口　研二　他	□	2単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
病理学の基礎的な概念を学び、術語・用語の使い方を学ぶ。病理学は人体の病気を対象とした学問であり、病気の原因と成り立ちを把握することが重要である。病理学概論では病気の成り立ちから炎症、腫瘍などのいくつかの病変カテゴリーに分類して、各々を学び、臓器や組織における疾患について学んでいく。それぞれの病気で生体内に起こっている変化を肉眼的および組織・細胞レベルで理解して、病気の成り立ち・仕組みと機能の変化を考える。	1年次	後期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
・病気が及ぼす生体内の変化を理解し、病気の成り立ち、仕組みを説明することができる ・疾患には病因があり、その因子を説明することができる	スライド等の資料に重要点などを記録しながら受講すること。
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
スライド、ホワイトボードを使用した講義を中心に進めていく。	講義内容の復習をすること（1コマにつき30分）
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
定期試験90% 出席及び授業へ取組む姿勢10%	「標準理学療法学・作業療法学　病理学」医学書院 「病気の地図帳」　講談社 「病気がみえる脳・神経」　ﾒﾃﾞｨｯｸﾒﾃﾞｨｱ

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容	担当教員
1	総論；病理学の概要、病因論、免疫	川口　研二
2	総論；代謝異常、放射線障害、老化、先天異常・奇形	〃
3	総論；循環障害、炎症・感染症	〃
4	各論；循環器（心臓・血管）	〃
5	総論；腫瘍	〃
6	各論；消化管	〃
7	総論；退行性病変、進行性病変	今村　哲夫
8	各論；運動器	〃
9	各論；呼吸器	川口　研二
10	各論；神経系	〃
11	各論；造血器	〃
12	各論；泌尿・生殖器	〃
13	各論；内分泌臓器	〃
14	各論；皮膚・感覚器	〃
15	定期試験・まとめ	〃

疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
臨床心理学	安里　勝人	□	1単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
リハビリテーションでは人の生物学的な側面だけでなく、心理学的、社会学的な側面の理解と配慮が欠かせない。心理的な理解や配慮がリハビリテーションの進行や結果に大きく影響することもある。 人の心理は目に見えづらく、目に見えづらい現象をどのように科学的に明らかにしていくのかが心理学になる。また、そうした明らかになった心理的な特徴を臨床場面に応用するのが臨床心理学である。 心理学と臨床心理学を学ぶことで、“こころ”の科学的な捉え方や人の多面的な理解、リハビリテーションを行う際の工夫を考えてもらいたい。また、心の問題や精神疾患の正確な理解を通し、メンタルヘルスリテラシーの促進を目指す。	１年次	後期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
・臨床心理学の概念を説明することができる ・リハビリテーションにおける心理学の重要性を説明することができる ・基本的な心理検査を実施することができる	スライド等の資料に重要点などを記録しながら受講すること。
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
スライドを使用した講義を中心に進めていく。	講義内容の復習をすること（1コマにつき30分）
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
定期試験90% 出席及び授業へ取組む姿勢10%	リハベーシック心理学・臨床心理学　医歯薬出版

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容
1	心理学とは
2	感覚・知覚・注意・認知
3	情動・動機付け・パーソナリティ・社会
4	記憶・学習
5	言語・概念・思考
6	発達と知能
7	臨床心理学とは
8	防衛機制／精神分析
9	心理アセスメント
10	臨床で用いられる心理検査／知能検査とパーソナリティ検査
11	臨床で用いられる心理検査／発達検査と神経心理学的検査
12	臨床心理学の介入技法（内面的）
13	臨床心理学の介入技法（行動的）
14	臨床心理学の介入技法（相談的）
15	定期試験・まとめ

疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
内科学	渡辺　庸子　他	□	2単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
内科学は解剖学・生理学を基礎とし、人体の疾患の中心をなすものである。近年の医学の進歩は各分野で大きく進歩し、各分野の知識は複雑となりそれについて理解するのに苦労しているのが現状である。限られた時間内で少しでも臨床に役立つ知識と学力を修めるべく要点をおさえ理解しやすく教えるように務めていく予定である。総論に続いて消化器・循環器・呼吸器・腎・肝・膵・代謝・内分泌・感染症・寄生虫・免疫・アレルギー・膠原病・血液について講義･修得してもらうことを狙う。	２年次	前期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
・解剖学、生理学を基盤とし疾患の発生機序を説明することができる ・理学療法士に関連の深い内科的疾患についてその特徴を説明できる。 ・疾患の病態生理、症状、検査、治療および予後について説明することができる	スライド等の資料に重要点などを記録しながら受講すること。
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
パワーポイントと資料を用いて講義を進める。	講義内容の予習・復習をすること。 分からない専門用語は自分で調べながら理解を深めること。
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
定期試験、出席及び授業へ取り組む姿勢を総合的に評価する。 定期試験90%　　出席及び授業へ取り組む姿勢10%	「標準理学療法学・作業療法学　内科学」 医学書院

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容	担当教員
1	内科学総論、診断、治療	渡辺　庸子
2	感染疾患	〃
3	循環器疾患；循環器疾患各論症候と病態生理	矢澤　卓
4	循環器疾患；循環器疾患の診断法、治療	〃
5	循環器疾患；循環器疾患各論	〃
6	呼吸器疾患；症候と検査所見、等	金城　匠
7	呼吸器疾患；感染性肺疾患、慢性閉塞性肺疾患、等	〃
8	呼吸器疾患；拘束性肺疾患、肺腫瘍、肺循環障害、等	〃
9	消化器疾患；消化器系の解剖生理、食道、胃、大腸、小腸	宮林　秀晴
10	肝胆膵疾患；胆、膵、肝疾患	古田　清
11	血液・造血器疾患；血病、貧血、リンパ腫など	平林　幸生
12	内分泌・代謝性疾患；内分泌・代謝性疾患各論	青木　雄次
13	内分泌・代謝性疾患；内分泌・代謝性疾患各論	〃
14	腎・泌尿器疾患	小宮山　斎
15	膠原病、アレルギー疾患、免疫不全	渡辺　庸子
16	定期試験	〃

疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
整形外科学	穂苅　行貴	□	2単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
整形外科疾患に対する病態、検査法、治療を理解することにより、理学療法に対する理解を深める。実際の医療の現場での臨床経験を踏まえて、治療に携わる医師が理学療法士に何を期待するのかを伝える。臨床現場でのレントゲン写真などを用いて、臨床に即した講義を行う予定。理学療法において整形外科疾患は、重要な位置を占める。機能解剖を踏まえて、各疾患の病態生理を理解し、理学療法士としての必要な知識と技術の向上に努める。	２年次	前期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
・整形外科疾患に関する人体解剖と生理について理解を深めることができる。 ・理学療法士に関連の深い整形外科的疾患についてその特徴を説明できる。 ・代表的な治療方法を説明できる。	解剖学の復習をしっかりしてから授業に臨むこと。 スライド等の資料に重要点などを記録しながら受講すること。
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
パワーポイントと資料を用いて講義を進める。	講義内容の予習・復習をすること。 分からない専門用語は自分で調べながら理解を深めること。
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
定期試験、出席及び授業へ取り組む姿勢を総合的に評価する。 定期試験90%　　出席及び授業へ取り組む姿勢10%	「病気がみえる 11　運動器･整形外科　」 メディックメディア

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容
1	整形外科基礎知識；骨・関節・神経の病態生理
2	運動器の評価、運動器の検査法
3	整形外科的治療法；保存療法、手術療法
4	炎症性疾患
5	代謝・内分泌性疾患、退行性疾患
6	先天性骨・関節疾患、循環障害と壊死性疾患
7	神経・筋疾患
8	骨・軟部腫瘍
9	脊椎疾患
10	骨折
11	脊髄損傷、関節における外傷性疾患
12	末梢神経における外傷性疾患
13	スポーツ障害
14	熱傷、切断および離断
15	定期試験　まとめ

疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
脳神経内科学	井上　敦　他	□	2単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
脳神経内科学は、ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝの体系、方法及び有効性を理解する上でもっとも重要な学問の一つである。本講義では、脳神経内科領域を中心に疾患全般につて理解を深めることを目的とする。病巣診断や神経徴候の診方、その臨床的意義及び神経学的所見の取り方と評価方法を修得する。各論では、中枢神経疾患、神経・筋疾患、末梢神経疾患、筋疾患などについて、その病因・病態・予後予測についても学習していく。本講義では、画像所見やVTR等も随時併用し講義していく。	２年次	前期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
・脳神経系の解剖生理について理解を深めることができる。 ・神経筋疾患の特徴的な神経徴候や検査方法を説明できる。 ・代表的な神経筋疾患について病態や症状を説明できる。	解剖学・生理学の復習をしっかりしてから授業に臨むこと。 配布資料等に重要点などを記録しながら受講すること。
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
パワーポイントや資料を用いて講義を進める。	講義内容の予習・復習をすること。 分からない専門用語は自分で調べながら理解を深めること。
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
定期試験、出席及び授業へ取り組む姿勢を総合的に評価する。 定期試験90%　　出席及び授業へ取り組む姿勢10%	「標準理学療法学・作業療法学　神経内科学」 医学書院

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容	担当教員
1	脳神経内科学総論；神経学的診断と評価、検査法（教科書③④）	小口　賢哉
2	脳神経内科学総論；神経症候学　意識障害、脳死、植物状態、頭痛、めまい、失神、頭蓋内圧亢進、髄膜刺激症状など脳外科領域の症候（教科書⑤⑥⑲）	福島　和広
3	脳神経内科学総論；神経症候学　運動麻痺（錐体路徴候、錐体外路徴候）（教科書⑦⑧）	福島　和広
4	脳神経内科学総論；神経症候学　運動失調、感覚障害、構音障害、嚥下障害（教科書⑨⑩⑰⑱）	井上　敦
5	脳神経内科学総論；神経症候学　高次脳機能障害　総論／失語（教科書⑪）	武井　洋一
6	脳神経内科学総論；神経症候学　高次脳機能障害　失認～遂行機能障害（教科書⑫⑬⑭⑮⑯）	武井　洋一
7	各論；脳血管障害（教科書⑳）	小口　賢哉
8	各論；認知症（教科書㉑）	武井　洋一
9	各論；脳腫瘍、外傷性脳損傷（教科書㉒㉓）	井上　敦
10	各論；脊髄疾患（教科書㉔）	小口　賢哉
11	各論；変性疾患、脱髄疾患（教科書㉕）	大原　慎司
12	各論；錐体外路の変性疾患（教科書㉖）	大原　慎司
13	各論；末梢神経障害（教科書㉗）	井上　敦
14	各論；てんかん、感染性疾患、中毒性疾患など（教科書㉘㉚㉛）	井上　敦
15	各論；筋疾患　（教科書㉙）	福島　和広
16	定期試験	井上　敦

疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】		【単位数/授業時数】
精神医学	松本　武典	□		2単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
精神医学の基礎知識、各種精神障害の原因・病態・治療法を理解することにより、理学療法士として必要な精神障害者に対する理解を深める。本講義では、主に精神医学の対象となる疾患や常態を概観し、その症状・治療について説明する。精神に悩みや痛みを持つ者に対しての理解を深め、リハビリテーション活動の実際に質することを目標とする。	２年次	前期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
・基本的な精神障害の病態、症状を列挙できる。 ・精神障害の基本的な治療について言える。 ・理学療法を実施する上での注意点について言える。	スライド等の資料に重要点などを記録しながら受講すること。
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
スライドを使用した講義を中心に進めていく。	講義内容の復習をすること。
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
定期試験、出席及び授業へ取り組む姿勢を総合的に評価する。 定期試験90%　　出席及び授業へ取り組む姿勢10%	「標準理学療法学・作業療法学　精神医学」　医学書院

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容
1	「精神医学の概要、精神疾患の分類、診断」「精神症候学」
2	「精神科治療学」
3	「精神医療の歴史」
4	「我が国の精神医療の歴史」
5	「精神疾患各論：統合失調症」
6	「気分症群」「ストレス関連症群」
7	「不安症群、強迫症、解離症群、摂食症群」「パーソナリティ症」
8	「物質使用症」
9	「神経認知症群」「てんかん」
10	「児童精神医学」「精神保健福祉」
11	「心の機能」「正常睡眠と睡眠障害」
12	「心の発達、ライフサイクルと心の健康」
13	「司法精神医学：医療観察法と精神鑑定」
14	「コンサルテーション・リエゾン精神医学、緩和ケア医療」
15	定期試験・まとめ

疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
小児科学	岩﨑 康　他	□	1単位 / 15時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
小児についての一般的な考え方、見方、病気の概要を理解してもらう。特に成長発達という、特有な現象を念頭においての病気の発生とかかわりを学んでいく。	２年次	前期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
小児疾患にどのような疾患があるかを理解を深めることができる。 主要疾患の病態生理，症状，診断，治療について説明することができる。 各疾患が理学療法を実施する上でどのように関わってくるかを考察できる。	積極的に取り組むこと。
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
講義を中心に進めていく。	配布資料を基に復習が必要。
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
定期試験、出席及び授業へ取り組む姿勢を総合的に評価する。 定期試験90%　　出席及び授業へ取り組む姿勢10%	「標準理学療法学・作業療法学　小児科学」　医学書院

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容	担当教員
1	概論：発育・発達・保健・診断と治療　診断と治療の概論	岩﨑　　康
2	新生児未熟児疾患、先天性異常と遺伝病、循環器疾患	〃
3	神経筋疾患、心身症	西村　貴文
4	呼吸器疾患、感染症、消化器疾患、内分泌・代謝疾患	倉田　研児
5	血液疾患、免疫アレルギー疾患、腎・泌尿器疾患、代謝疾患	北原　正志
6	脳性麻痺	鈴木　芳則
7	重症心身障害児	〃
8	定期試験・まとめ	〃

疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
公衆衛生学	青柳省吾　他	□	1単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
公衆衛生学とは、社会的な取り組みとして、私たち人間の健康を維持・増進し、さまざまな病気を予防するために必要な基礎知識を学ぶ学問である。 疾病予防や健康の維持・増進・向上の重要性を理解し、専門職としての自分を見出していく。 薬理や栄養についても学び、リハビリテーションに関連する疾患における基礎的な知識を身につける。	２年次	後期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義・演習	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
健康の概念・予防の重要性を説明することができる。 栄養素とその機能、適切な栄養の取り方を理解することができる。 食生活の安全を確保するため食中毒の予防や食品衛生制度、国民の栄養問題について概説できる。 救急救命の方法を理解し、実践することができる。 医用画像の読み方を理解することができる。	配布資料等に重要点などを記録しながら受講すること。
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
配布資料を基に、講義を中心に進める。	配布資料を基に復習すること。
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
定期試験、出席及び授業へ取り組む姿勢を総合的に評価する。 定期試験90%　　出席及び授業へ取り組む姿勢10%	「公衆衛生学」ヌーヴェルヒロカワ

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容	担当教員
1	総論；公衆衛生とは、健康と環境	小野　佳子
2	疾病予防と健康管理	青柳　省吾
3	主な疾病の予防、環境保健	青柳　省吾
4	食品の安全・食中毒	藤岡　由美子
5	食品衛生管理・国民の栄養	藤岡　由美子
6	食品保健と栄養・総括	藤岡　由美子
7	薬を理解するための基礎知識	青木　英則
8	薬理の概念と分類	青木　英則
9	薬の作用機序と体内動態	青木　英則
10	薬効に影響を及ぼす要因と依存	青木　英則
11	救急救命とは	木曽消防署北分署
12	救急救命法の実践	木曽消防署北分署
13	医用画像の基礎	青柳　省吾
14	医用画像を読む	青柳　省吾
15	定期試験　まとめ	青柳　省吾

疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
リハビリテーション医学	村松　秀明　他	☑ どの教員も理学療法士として病院等における臨床経験があり、その経験を基に授業を行う。	1単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
リハビリテーション医学は運動障害を中心にその診断・治療さらには予防を行う医学である。本講義では、障害を残す疾患の中で、理学療法士が関わる主たる疾患を取り上げ、その基本的リハビリテーションアプローチについて学ぶ。疾患の病態や予後を理解することで、機能障害・活動制約・参加制約との関連と、QOLの向上・目標達成を目指すものであることを理解する。	1年次	前期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義・実技	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
・各疾患を理解し、特徴を説明できる。 ・各疾患に対応する、代表的な評価	・積極的に授業参加をすること。 ・実技時は身だしなみを整え、動きやすい服装で参加すること。 ・障害者スポーツ指導員の認定項目の授業がある。
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
・専任教員のオムニバスで行う。 ・教科書、パワーポイントと配布資料を基に、講義を行う。 ・疾患の基礎知識を解剖学・生理学などの関連領域から学び、障害特性とリハビリテーションとの関りについて理解する。	次講義の始めに振り返りの小テストを実施することから、配布資料、教科書を基に復讐と整理が必要である。
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
次講義の初めに小テストを行い、受講態度、出席状況などから総合的に評価し、60点以上を合格とする。 小テスト90% 授業に取り組む姿勢及び出席状況10%	「リハビリテーション医学テキスト」南江堂 「標準理学療法学・作業療法学　解剖学」医学書院

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容	担当教員
1	骨折、外傷	塩澤　崇
2	関節疾患	〃
3	脳血管疾患	木島　　隆
4	脊椎疾患	藤堂　庫治
5	切断と義足・義手	村松　秀明
6	脊髄疾患	藤堂　庫治
7	小児疾患	小野　佳子
8	前半のまとめ	村松　秀明
9	高齢者のリハビリテーション	青柳　省吾
10	末梢循環障害	〃
11	内部疾患	吉澤　利夫
12	関節リウマチ	村松　秀明
13	神経筋疾患	吉澤　利夫
14	末梢神経障害	木島　　隆
15	スポーツ外傷	藤堂　庫治
16	後半のまとめ	村松　秀明

保健医療福祉とﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝの理念

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】		【単位数/授業時数】
リハビリテーション概論	村松　秀明　他	☑	それぞれ理学療法士・看護師・言語聴覚士・作業療法士・社会福祉士・身障スポーツの指導者として実務経験を有している。	2単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
リハビリテーションの理念の形成から発展の過程につい学ぶ。リハビリテーションの理念・定義・歴史・目的・関係法規を中心に、包括的なリハビリテーションの考え方を理解する。また、他職種との連携や地域での活動・連携で進めるリハビリテーションの、チームでの協業を理解する。専門職として必要なまた医学的リハビリテーション、職業的リハビリテーション、社会的リハビリテーション、教育的リハビリテーションについて理解することを目標とする。	1年次	前期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義・実技	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
・リハビリテーションとは何かを説明できる。 ・障害について説明でき、障害分類を理解する。 ・関係他職種の業務、役割について説明できる。 ・障害者スポーツを体験し、指導員の認定要件を獲得する。	・積極的に授業参加をすること。 ・実技時は身だしなみを整え、動きやすい服装で参加すること。 ・障害者スポーツ指導員の認定項目の授業がある。
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
・外部講師とのオムニバスで行う。 ・パワーポイントと配布資料を基に、講義・実技を行う。	配布資料を基に復習と整理が必要である。
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
定期試験、受講態度、出席状況などから総合的に評価し、60点以上を合格とする。 定期試験90% 授業に取り組む姿勢及び出席状況10%	参考書： リハビリテーション概論　永井書店 リハビリテーション序説　医学書院

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容	担当教員
1	リハビリテーションの概念・理念・定義、IL、ノーマライゼーション	村松　秀明
2	健康・疾患・障害　疾病と障害の分類（ICD、ICIDH、ICF）	〃
3	リハビリテーションの諸段階、種類	〃
4	障害者の心理（防衛機制、障害の受容）	〃
5	リハビリテーションの過程（評価、ゴール）	〃
6	医療とリハビリテーション	〃
7	まとめ	〃
8	看護師の業務・役割	工藤　和子
9	言語聴覚士の業務・役割	古木ひとみ
10	作業療法士の業務・役割	佐藤　陽子
11	ソーシャルワーカーの業務・役割	堀内　寛之
12	身障スポーツの理解と実践（全国障がい者スポーツ大会の概要）	長野県障がい者スポーツ協会
13	身障スポーツの理解と実践（障がい者スポーツ推進の取り組み）	〃
14	身障スポーツの理解と実践（障害のある人との交流）	〃
15	定期試験　総括	村松　秀明

保健医療福祉とリハビリテーションの理念

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
保健医療福祉概論	小野　佳子	☑ 理学療法士として病院において20年以上の臨床経験があり、その経験を基に授業を行う。	1単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
理学療法士が業務とする、あるいは活動する保健・医療・福祉の領域について、法制度やサービス内容を理解しておくことは、理学療法実施・展開にとって極めて大切である。特に介護保険や社会福祉法の制度など保健医療福祉制度は利用者本位の統合された多様な支援となるなどﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ領域において多大な影響を及ぼしている。本講義では保健・医療・福祉の各領域について、法制度の動向やサービス内容を理解し、その中での理学療法士の役割を理解していく。	１年次	前期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義・演習	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
医療の基本的な仕組みについて理解し、重要な用語を使えるようになる。 医療保険制度について理解し、実生活に役立てることができる。 介護保険制度について学び、基本的用語を使えるようになる。 保健予防システムを理解し、自己の健全な成長や将来の業務に役立てることができる。	Ａ４サイズの紙ファイルを用意してください。 解説時に、重要なことば等を聞き取り、資料等に書き込むようにしてください。グループ学習の際は積極的に発言しましょう。
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
講義資料を配布します。板書の場合は資料に写した後に、解説をする。別に配布資料、パワーポイント等も利用する。 調べ学習、発表等も含め、共同学習も行う。 原則として、講義終了時に学習内容について小テストを実施する。	講義で学んだ新しい用語をひとつ選び、調べてワークシートに記入してください。 新聞やニュースに関心を持ち、医療関係の記事を読んでください。
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
受講態度10%（出席、態度、宿題、等） 期末試験90%	教科書：「わかりやすい公衆衛生学」ヌーヴェルヒロカワ

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容
1	医療の提供体制；健康の指標
2	医療の提供体制；医療機関の種類、病床の種類
3	医療の提供体制；医療従事者、地域医療
4	医療の提供体制；医療の情報、評価
5	医療保障制度；医療保険の歴史、基本的な仕組み、種類
6	医療保障制度；診療報酬、自己負担
7	医療保障制度；保険給付の種類・内容、高齢者医療制度
8	介護保障制度；介護保険の仕組み、理学療法士の役割、地域包括ケアシステム
9	介護保障制度；まとめ、地域保健活動
10	保健予防ｼｽﾃﾑ；母子保健
11	保健予防ｼｽﾃﾑ；精神保健
12	保健予防ｼｽﾃﾑ；健康増進
13	保健医療福祉に関する情報収集
14	まとめ；復習、期末試験対策
15	期末試験、まとめ

保健医療福祉とリハビリテーションの理念

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
社会福祉学	宮澤　優一	□	1単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
今我々が迎えている少子高齢化の現代社会において、福祉の専門職と理学療法士らリハビリテーションに従事している人々との連携は、福祉の向上にとって不可欠と考える。 本講義では、社会福祉の理念と社会福祉体系、そして基本的な知識について幅広く理解し、その過程において医療に従事する専門職として、人間を総合的に捉えることの重要性を学ぶことを目標とする。	１年次	前期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義・演習	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
社会福祉学の歴史と目的を理解する。 社会保障制度の概要を理解し説明することができる。 社会福祉事業について理解することができる。 社会福祉の課題について考え、討論することができる。 理学療法に必要な社会福祉と社会保障の基礎的知識を理解することができる。	グループワークなど積極的に参加すること。
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
パワーポイント、教科書を中心に講義形式で授業を進める。 グループワークを適宜取り入れる。	法律や制度など難しい専門用語が出てくるため、資料を確認するとともに、自分でも調べながら理解を深めること。
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
定期試験及び課題、出席及び授業へ取り組む姿勢を総合的に評価する。 定期試験90%、出席及び授業へ取り組む姿勢（課題）10%	新社会福祉とは何か（中央法規）

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容
1	社会福祉とは：社会福祉の歴史と目的
2	現代社会と社会福祉の課題　社会保障論
3	社会福祉の法と行財政：社会保障の考え方
4	社会保障制度：年金制度と医療保険制度
5	社会保障制度：公的扶助制度
6	社会福祉事業：児童福祉、保育
7	社会福祉事業：児童福祉、要援護児童
8	社会福祉事業：障がい者スポーツに関する諸施策
9	社会福祉事業：障害者総合支援法、精神障害
10	社会福祉事業：高齢者福祉、変遷と介護保険
11	社会福祉事業：認知症の理解
12	社会福祉援助技術
13	社会福祉の課題：地域福祉の推進１
14	社会福祉の課題：地域福祉の推進2
15	定期試験・まとめ

基礎理学療法学

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
理学療法概論	村松　秀明	☑ 理学療法士として病院・施設において20年以上の臨床経験、実習指導の経験があり、その経験を基に授業を行う。	1単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
理学療法の全体像の把握と、定義や歴史的、法的位置づけ、理学療法の流れや方法論などを理解し、病態・疾患学、各技術や実習を学ぶ基礎を作る。加えて、自己学習能力を高め専門科目への転移を促す。そして、リハビリテーションチームの一員としての理学療法士の業務・役割と職務内容を理解する。また、社会人として、医療人としての心構えを構築し、資質を身につける。	1年次	前期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義・実技	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
・理学療法の定義を説明できる。 ・理学療法の目的、手段について説明できる。 ・理学療法の代表的な対象疾患について説明できる。	・積極的に授業参加をすること。 ・実習時は身だしなみを整え、動きやすい服装で参加すること。

【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
・パワーポイントと教科書、配布資料を基に、講義・実技を行う。 ・実技ではデモンストレーション後、学生同士で実践する。 ・必要に応じレポートを課題とする。	各講義内容は互いに関連しており、他科目の学修内容も含まれる。教科書、配布資料を基に復習と整理が必要である。

【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
定期試験、レポート、受講態度、出席状況などから総合的に評価し、60点以上を合格とする。 定期試験80%　レポート課題10% 授業に取り組む姿勢及び出席状況10%	教科書：理学療法概論第4版 千住秀明　監修　　神陵文庫 参考書：講義の中で紹介していく

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容
1	専門職と人間性
2	理学療法の概念と歴史
3	理学療法の定義と法律
4	理学療法の意義と役割
5	理学療法の対象
6	廃用症候群
7	運動療法
8	物理療法
9	医療事故
10	理学療法の記録と過程
11	領域・活動分野
12	疾患の理解　脳血管障害
13	疾患の理解　骨折、パーキンソン病
14	まとめ
15	定期試験　総括

基礎理学療法学

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
基礎実習	小野　佳子　他	☑ 全教員が理学療法士として病院等における臨床経験、実習指導の経験があり、その経験を基に授業を行う。	1単位 / 45時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
医療・福祉の仕事がどういうものなのか、実際の現場を通じて体験する。患者様の生活のお手伝いをしながら、患者様との関わり方や患者様のADL・障害等について学んでいく。また社会人として、医療人としての心構えを構築し、資質を身につけることを目標とする。	1年次	前期
	【授業形態】	【履修区分】
	演習・実習	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
社会人、医療人として基本的な態度・行動ができる 対象者との人間関係を構築できる 疾病、障害、ADL障害、他職種の役割、リスク管理について理解できる 対象者・障害者の諸問題を把握する	社会人・医療人としての基本的な態度・行動に心がけること。
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
グループごと各施設に分かれて介護体験をする	実習に臨むまでに、ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝの内容をよく復習しておくこと。
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
下記の割合と実習中の姿勢を総合的に評価する。 報告会50%、出席20%、実習態度20%、提出10%	適宜資料を配布する

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容
1	介護実習に向けての心構え
2	オリエンテーション；介護実習をするにあたっての注意事項
3	〃
4	オリエンテーション；介護実習をするにあたっての実技
5	〃
6	〃
7	介護実習；各施設に分かれて介護体験をする（1日目）
8	
9	
10	
11	〃　（2日目）
12	
13	
14	
15	〃　（3日目）
16	
17	
18	
19	まとめ；学校にてグループワーク
20	〃
21	〃
22	〃
23	報告会
24	〃
25	〃
26	〃

基礎理学療法学

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
運動療法学総論	青柳　省吾	☑ 理学療法士として病院において7年以上の臨床経験があり、その経験を基に授業を行う。	2単位 / 60時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
運動療法とは各種疾患が原因で生じる機能障害に対して、予防と軽減と回復を目的に施行する治療手段であり、理学療法の中核をなす治療手技である。 運動療法の基礎的な原理と方法を学ぶ。運動器系や呼吸循環器代謝系の解剖生理、病理、学習理論の基礎的原理と関節可動域運動、筋力増強運動、持久力増強運動、協調性運動、等、具体的治療方法との関係を理解する。運動療法の基礎を学習し、この後に続く各疾患に対する運動療法を理解し、実施するための基礎とする。	２年次	前期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義・実技	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
運動療法に必要な解剖生理運動学の基本的知識を定着させる。 基本的な運動療法の目的、方法、注意点について理解し、説明できる。 実技で基本的な運動療法を体験し、各疾患に対する運動療法を学ぶときや臨床実習に役立てることができる。	解剖生理運動についてなどの基礎知識と理学療法のつながりを理解できるよう能動的に学ぶこと。 共同学習では責任を持って取り組むこと。 実技の際は動ける服装で、積極的に練習すること。
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
教科書、配布資料、パワーポイント等により講義する。 調べ学習、発表等も含め、共同学習も行う。 講義時間内に小テストを実施することもある。実技も行う。	1年次で履修する「解剖学」「生理学」「運動学」の内容を復習しておくこと。毎回の講義終了後、内容を見直すこと。宿題を忘れず実施すること。
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
受講態度10%（出席、態度、宿題、等） 定期試験90%	「標準理学療法学　運動療法学総論」　医学書院

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

コマ数	授業内容	担当教員
1	運動療法の基礎；概念、運動療法とは	青柳省吾
2	運動療法の基礎；関節の構造	〃
3	運動療法の基礎；筋と筋収縮	〃
4	〃	〃
5	運動療法の基礎；随意運動と運動制御の生理	〃
6	〃	〃
7	運動療法の基礎；運動器系・神経系の組織の病態生理と修復	〃
8	〃	〃
9	運動療法の基礎；呼吸の基礎　運動と呼吸	〃
10	〃	〃
11	運動療法の基礎；運動と循環	〃
12	〃	〃
13	運動療法の基礎；運動と代謝	〃
14	〃	〃
15	基本的な運動療法；持久力増強運動	〃
16	〃　持久力増強運動　実技	〃
17	基本的な運動療法；運動の種類、器具	〃
18	〃	〃
19	実技：運動の種類	〃
20	〃	〃
21	基本的な運動療法；関節可動域運動	〃
22	〃　実技	〃
23	実技：関節可動域運動	〃
24	〃	〃
25	基本的な運動療法；協調運動の理論	〃
26	実技：協調性運動	〃
27	基本的な運動療法；筋力増強運動	〃
28	〃	〃
29	実技：筋力増強運動	〃
30	〃	〃
31	定期試験、まとめ	〃

基礎理学療法学

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
理学療法研究法	木島　隆	☑ 理学療法士として病院において10年以上の臨床経験があり、ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ分野の研究にも従事している。	1単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
臨床的研究論文を選択し、理学療法分野の研究の動向を学ぶ。理学療法を提供するために、研究論文を読むことの重要性を理解し、論文作成の知識を身につける。医療従事者として研究の目的や意義を理解し、実践を通じて基礎的な研究能力を身につける。論理的な文章を作成する過程を経験し、論文の構成要素などを具体的に学び、レビューを作成する。	３年次	通年
	【授業形態】	【履修区分】
	講義・演習	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
医療・理学療法におけるエビデンスの重要性を理解し説明ができる。 論文の検索をすることができる。 理学療法の一般的な臨床の流れの中に研究的視点の重要性が理解できる。 科学的な研究方法の基礎を説明でき、研究の計画が立てられる。	スーツで参加すること。また、将来の自分を予想しながら参加すると自己の形成に役立つと思われる。
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
理学療法の一般的な流れを説明し、その中で責任・意義を学ぶ。また、科学論文を読むための知識として論文の構成と検索方法を学ぶ。その後、研究の目的をそれぞれ決め検証方法を検討し発表をしてもらう。	
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
定期試験、課題の発表、出席及び授業へ取り組む姿勢を総合的に判断する。 定期試験：40%、課題提出：40％ 課題・出席及び授業へ取り組む姿勢：20%	随時資料を配る

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容
1	理学療法士の責任と義務（理学療法士の臨床の意義について学習する）
2	理学療法士の臨床の意義（理学療法士が行う思考過程・意思決定のプロセスを明確にする）
3	臨床の流れ（CVA・運動器疾患の入院から退院までの主なプロセス、PTの関わり・シュミレーション）
4	病体全般に対する理解（病態、予後、一般的な治療法）
5	科学論文（学術論文の基本構成を説明できる）
6	研究の基本的な構造
7	研究の実験計画・研究の質について
8	中間試験・まとめ
9	研究テーマに関する論文収集
10	研究テーマに関する文献抄読を行いレビューレポートを作成する
11	〃
12	〃
13	〃
14	〃
15	〃

基礎理学療法学

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
臨床技術セミナー	吉澤　利夫	☑ 理学療法士として病院において10年以上の臨床経験、実習指導の経験があり、その経験を基に授業を行う。	1単位 / 45時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
臨床実習に必要な基礎知識の確認をしながら、各臨床場面に適した実技練習をする。これらを総合して、客観的臨床能力試験（OSCE）を経験することにより、対応能力（臨床能力）を高める。また、臨床実習に必要な基礎知識の確認のためCBTを行う。また、この科目を実習前試験として位置づけ、総合臨床実習（総合Ⅰ・総合Ⅱ）の準備とする。	３年次	前期
	【授業形態】	【履修区分】
	演習・実技	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
事前情報から患者像を読み取ることができる。 適切な接遇を持って患者と接することができる。 リスクを管理しながら評価・介助することができる。 正確に評価することができる。	臨床実習にふさわしい身だしなみで参加すること。 患者役は徹底して患者に徹すること。 安全に愛護的に手際よく評価できるように真剣に取り組むこと。
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
課題に対する実技練習を行い、技術を習得していく。	空き時間には積極的に練習に励むこと。 提示された症例について不明な点は教員に質問したり、事前に調べてくること。
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
授業態度、OSCEの試験結果、出席状況を総合的に判断して評価する。 授業態度とOSCE試験結果60%、CBT：30%、出席・授業の取り組む姿勢：10%	適宜配布する

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容
1	OSCE①　説明
2	練習
3	〃
4	〃
5	OSCE①　試験
6	〃
7	〃
8	〃
9	OSCE②　説明
10	練習
11	〃
12	〃
13	OSCE②　試験
14	〃
15	〃
16	〃
17	OSCE③　説明
18	練習
19	練習・確認試験
20	〃
21	CBT
22	〃
23	まとめ

基礎理学療法学

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
総合理学療法セミナー	小野　佳子　他	☑ 全教員が理学療法士として病院等における臨床経験があり、その経験を基に授業を行う。	1単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
国家試験に対する受験対策を行う。グループ学習、ペア学習を中心に、3年間で学んだ知識の整理・まとめをしていく。国家試験模試を随時行い基礎知識・専門知識の向上を図り、国家試験合格を目指す。 基本的な知識と思考力を定着させることにより、理学療法士としての第一歩を開始できるよう学習する。	３年次	前期・後期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義・演習	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
グループの一員として協力し合って計画的に学習課題を達成できる。 履修した科目の知識を整理し、問題の解答を正しく選択することができる。 国家試験問題に対して積極的に確実な解答を得られるよう思考することができる。	グループの役割を決め、責任を持って協力し合うこと。 学習用具や教室物品の管理に配慮すること。 時間を守って行動すること。
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
4～5名のグループ活動、ペア活動を中心に進める。また、基本的頻出項目について講義も実施する。	グループ内で計画した課題を必ず作成すること。 模擬試験の復習を必ずすること。 国家試験過去問題などの練習問題を解くこと。 記憶するよう努力すること。
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
複数回実施する模擬試験を定期試験結果とみなす。特に、業者模試結果を重要視する。 定期試験　100%	使用してきたすべての教科書

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容	担当教員
1	オリエンテーション　　学習の進め方指導	
2	基礎分野の学習方法指導　　まとめノート作成方法等の指導	
3	問題の解き方や注意点について	
4	運動学	
5	物理療法学	
6	呼吸・循環	
7	その他の内部障害	
8	評価	
9	中枢疾患とPT	
10	義肢・装具	
11	ADL・地域包括・予防	
12	精神・臨床心理	
13	脊髄損傷	
14	整形外科	
15	定期試験　まとめ	

理学療法管理学

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
理学療法教育論	小野　佳子	□	1単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
理学療法士の数の増加と並行し、質の担保がますます重要になってきている。将来理学療法の現場に出たときの職場管理や理学療法教育についての必要な知識を身につけ、それらに必要な能力を培うことを目的とする。講義・グループワークを通して、知識・考え方を概論的に理解できること、臨床現場での管理や他職種との連携などを学び、実行できる様になる。	３年次	前期・後期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義・演習	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
・理学療法養成教育の内容や歴史について説明できる。 ・診療参加型臨床実習の内容や評価について説明できる。 ・臨床教育、生涯学習について説明できる。	調べ学習や個人課題では、集中して取り組むこと。 グループ学習では、積極的にディスカッションし、責任を持って各自の役割を果たすこと。
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
グループ学習を中心に進める。 パワーポイントや資料を使った講義も行う。	個人課題、グループ課題が時間内終了しなかった場合は取り組んでください。
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
受講態度（出席、態度、等）：20% 個人課題への取り組み：30% グループ課題への取組、発表：50%	教科書：「リハビリテーション専門職のための教育学」　医歯薬出版 参考書：「リハビリテーション管理学」医学書院 その他、資料を配布する。

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容	担当教員
1	オリエンテーション、自分史年表	小野　佳子
2	理学療法士養成教育の歴史と特徴	小野　佳子
3	診療参加型臨床実習	木島　　隆
4	学習・成長を促す方法　ティーチング・コーチング　ハラスメント防止	小野　佳子
5	臨床実習前後の評価（OSCE）	小野　佳子
6	自律性を伸ばす教育と学習・生涯学習（グループワーク） 学習者への動機づけ、自律性を高める（グループワーク）	小野　佳子
7	発表	小野　佳子
8	理学療法教育カリキュラム（グループワーク） 教育目標・教育評価（グループワーク）	小野　佳子
9	発表	小野　佳子
10	理学療法士国家試験出題基準　内容と経験の確認	小野　佳子
11	理学療法士国家試験出題基準　前回の出題問題の確認	小野　佳子
12	生涯学習制度・臨床教育の方法（グループワーク） 成長を促す手法　　（グループワーク）	小野　佳子
13	発表	小野　佳子
14	まとめ　自分史年表　今後の展望　作成（個人課題）	小野　佳子
15	まとめ　自分史年表　今後の展望　発表	小野　佳子

理学療法管理学

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
医療管理学	青柳　省吾	☑ 理学療法士として病院において7年の臨床経験があり、その経験を基に授業を行う。	1単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
理学療法士に求められる役割・管理業務の基本、諸制度について学ぶ。頻発する医療事故を概観し、医療現場の現状と医療職を取りまく社会的環境を理解する。事故発生のメカニズムと事故分析、事故対策について学習する。講義・グループワークを通して、リハビリテーションにおける施設基準や診療報酬の知識・考え方を概論的に理解できること、臨床現場でのリスク管理や他職種との連携などを講義・演習を通して学び、実行できる様になることを目標とする。	1年次	後期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義・演習	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
理学療法士に関わる職業倫理、職場管理について理解できる。保険医療を取り巻く諸制度を理解できる。医療管理の必要性について理解できる。医療事故の実際を知り、安全対策の必要性について理解する。事故の発生要因について説明できる。診療報酬・施設基準について理解できる。臨床でのリスク管理について理解できる。標準感染予防策について理解し、実施することができる。	保健医療福祉概論と結びつけて、解釈すると理解に繋がる
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
パワーポイントと資料を用いて概要を説明したのち、調べ学習・演習を個人または班に分かれて行う。	配布資料をもとに復習を行うこと。
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
定期試験、課題提出、出席及び授業へ取り組む姿勢を総合的に評価する。 定期試験80%　課題提出10%　出席及び授業へ取り組む姿勢10%	適宜、資料を配布する 「理学療法管理学」医歯薬出版 「シンプル衛生公衆衛生学」　南江堂 「リハビリテーション　リスク管理ハンドブック」 メジカルビュー社

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

コマ数	授業内容
1	医療管理について
2	感染対策について・標準予防策の方法
3	職業倫理
4	組織運営とマネジメント（インシデント・アクシデントレポート）
5	理学療法業務のマネジメント
6	保健・医療・福祉を取り巻く諸制度とマネジメント（医療保険制度・介護保険制度）
7	診療記録と書類管理（グループワーク）
8	リハビリテーション施設基準・診療報酬（グループワーク・発表）
9	〃
10	臨床におけるリスク管理①　KYTトレーニング
11	臨床におけるリスク管理②　患者の触れ方・介助の仕方
12	臨床におけるリスク管理③　疾患別・病期別のリスクマネジメント
13	〃
14	〃
15	定期試験　まとめ

理学療法評価学

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
理学療法評価学Ⅰ	塩澤　崇	☑ 理学療法士として病院において7年の臨床経験があり、その経験を基に授業を行う。	1単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
理学療法の一連の流れにおける評価の位置づけを理解し、理学療法評価を構成する代表的な検査・測定項目の意義・目的・内容・手技について学習する。この科目では理学療法評価の基本となる、バイタルサイン、身体計測、関節可動域測定法を実施するために、各評価の目的と方法を理解し、判定基準・検査結果の解釈や注意点についても学習する。	1年次	後期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
理学療法における評価の位置づけを説明することができる 理学療法評価を構成する代表的な検査・測定の目的と意義を説明することができる 検査・測定によって得られた情報がどのような意味を持つのか説明することができる	
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
パワーポイントと配布資料を用いて講義と実技を行う。	形態測定は骨指標を確認すること。 関節域測定に関しては、基本軸、移動軸を確認すること。
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
定期試験、出席及び授業へ取り組む姿勢を総合的に評価する。 定期試験90%　出席及び授業へ取り組む姿勢10%	「理学療法評価法」金原出版 「徒手筋力検査法」　協同医書

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容
1	評価の基礎知識：総論1
2	評価の基礎知識：総論2
3	評価の基礎知識：各種評価の総論
4	バイタルサイン①
5	バイタルサイン②
6	形態測定①
7	形態測定②
8	まとめ
9	神経学的検査法：脳神経の検査法1
10	神経学的検査法：脳神経の検査法2
11	関節可動域測定の概要
12	関節可動域測定（上肢）
13	関節可動域測定（下肢）
14	まとめ
15	定期試験　まとめ

理学療法評価学

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
理学療法評価技術論Ⅰ	塩澤　崇　他	☑ 理学療法士として病院において7年の臨床経験があり、その経験を基に授業を行う。	2単位 / 60時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
理学療法評価学Ⅰで学んだ知識を基に、理学療法評価の基本となる、バイタルサイン、身体計測、関節可動域測定法の技術を学習する。実際にその検査を実践するための手順・方法・注意点などについて学び、基本的な評価が正確に安全に実施できるようになる。	1年次	後期
	【授業形態】	【履修区分】
	演習・実技	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
バイタルサインを測定することができる 形態測定を実施することができる 関節可動域測定を実施することができる	実技中心になるため、実習に臨める格好で参加すること。 実技練習は、臨床現場を想定し真剣に取り組むこと。
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
パワーポイントと配布資料を用いて手順・方法を説明したのち、実技を行う。 実技ではデモンストレーション後、学生同士で実践する。	関節域測定に関しては、基本軸、移動軸を確認すること。 授業後には実技練習を繰り返し行うこと。
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
OSCEと出席及び授業へ取り組む姿勢を総合的に評価する。 OSCE 90%　出席及び授業へ取り組む姿勢10%	「理学療法評価法」金原出版

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容	担当教員
1	バイタルサイン実技（呼吸・脈拍）	吉澤利夫
2	バイタルサイン実技（血圧・体温・意識レベル）	〃
3	バイタルサイン：まとめ	〃
4	形態測定実技（四肢長）	〃
5	形態測定実技（周径）	〃
6	形態測定：まとめ	〃
7	脳神経の検査法実技	〃
8	脳神経の検査法：まとめ	〃
9	グループにて総演習	〃
10	グループにて総演習	〃
11	実技試験①　（バイタルサイン・四肢長・周径）	〃
12	〃	〃
13	関節可動域測定実技（肩関節・肘関節・前腕の自動運動）	塩澤　崇
14	関節可動域測定実技（手関節・頸部、胸腰部の自動運動）	〃
15	関節可動域測定実技（肩関節・肘関節・前腕の他動運動）	〃
16	〃	〃
17	関節可動域測定実技（手関節・頸部、胸腰部の他動運動）	〃
18	〃	〃
19	関節可動域測定　上肢のまとめ	〃
20	関節可動域測定実技（股関節・膝関節の自動運動）	〃
21	関節可動域測定実技（足関節・足部・肩甲帯の自動運動）	〃
22	関節可動域測定実技（股関節・膝関節の他動運動）	〃
23	〃	〃
24	関節可動域測定実技（足関節・足部・肩甲帯の他動運動）	〃
25	〃	〃
26	関節可動域測定　下肢のまとめ	〃
27	グループにて総演習	〃
28	グループにて総演習	〃
29	実技試験②　（関節可動域測定）	〃
30	〃	〃

理学療法評価学

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
理学療法評価学Ⅱ	塩澤　崇　他	☑ どの教員も理学療法士として病院等における臨床経験があり、その経験を基に授業を行う。	2単位 / 60時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
理学療法評価学Ⅰに続き、基本的な評価法を学習する。各評価における検査・測定の目的・方法を理解し、実際の検査・測定を総合的に行えるようになることを目標とする。この科目ではMMT、筋緊張検査、感覚検査、反射検査などを実施するために、各評価の目的と方法を理解し、判定基準・検査結果の解釈や注意点についても学習する。 検査結果より抽出された問題点、治療プログラムとの関連性を考えられるようにす	２年次	前期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
MMTの概念を述べることができる MMTの概念を使用し、筋力の段階付けを実施することができる 一般的検査方法（筋緊張、反射、協調性、感覚、疼痛、片麻痺機能）などの検査目的を理解し説明することができる。	

【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
MMT:配布資料を用いて方法を説明。 一般的検査は配布使用を用いて理論・方法を説明し実技にて検査方法を体験する。	MMT：授業が始まる前に筋の起始停止を復習すること。

【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
定期試験、出席及び授業へ取り組む姿勢を総合的に評価する。 定期試験90%　出席及び授業へ取り組む姿勢10%	「理学療法評価法」　金原出版 「徒手筋力検査法」　協同医書 「ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝのための画像の読み方」ﾒﾃﾞｨｶﾙﾋﾞｭｰ

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容	担当教員
1	MMT概要	塩澤　崇
2	上肢1　肩	〃
3	上肢1　肩	〃
4	上肢2.3　肘　前腕　手関節	〃
5	上肢4　肩甲骨	〃
6	上肢4　肩甲骨	〃
7	練習　上肢	〃
8	下肢1　股関節	〃
9	下肢1　股関節	〃
10	下肢2　膝関節　足関節	〃
11	下肢3　体幹 表情筋	〃
12	練習　下肢	〃
13	画像評価の基礎	〃
14	画像評価の基礎（脳血管疾患、骨関節疾患、胸部・腹部疾患）	〃
15	画像診断の基礎（脳血管疾患、骨関節疾患、胸部・腹部疾患）	〃
16	筋緊張の検査法	木島　　隆
17	〃	〃
18	反射の検査法；深部腱反射・表在反射・病的反射	〃
19	〃	〃
20	姿勢反射の検査法	〃
21	〃	〃
22	協調性の検査法	〃
23	〃	〃
24	感覚検査法；体性感覚	〃
25	〃	〃
26	疼痛の評価法	〃
27	〃	〃
28	片麻痺運動機能検査	〃
29	〃	〃
30	レポート・レジメの書き方	〃
31	定期試験・まとめ	〃

理学療法評価学

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
理学療法評価技術論Ⅱ	塩澤　崇　他	☑ どの教員も理学療法士として病院等における臨床経験があり、その経験を基に授業を行う。	2単位 / 60時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
理学療法評価学Ⅱで学んだ知識を基に、基本的な評価法を学習する。MMT、筋緊張検査、感覚検査、反射検査などの技術を学習する。実際にその検査を実践するための手順・方法・注意点などについて学び、基本的な評価が正確に安全に実施できるようになる。	２年次	後期
	【授業形態】	【履修区分】
	演習・実技	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
MMTの概念を使用し、筋力の段階付けを実施することができる MMTの技術を正確に実施することができる 一般的検査方法（筋緊張、反射、協調性、感覚、疼痛、片麻痺機能）などの検査目的を理解し健常人に検査ができる。	実技中心になるため、実習に臨める格好で参加すること。 実技練習は、臨床現場を想定し真剣に取り組むこと。
【授業の方法】	**【授業時間外学修（予習・復習等）】**
MMT:実技ではデモンストレーション後、学生同士で実践する。 一般的検査はデモンストレーション後班ごとに練習、その後知識の確認のため小テスト、実技を披露する。	MMT：授業が始まる前に筋の起始停止を復習すること。
【成績評価の方法と基準】	**【教科書・参考書】**
OSCEと出席及び授業へ取組む姿勢を総合的に評価する。 OSCE 90%　出席及び授業へ取り組む姿勢10%	「理学療法評価法」　金原出版 「徒手筋力検査法」　協同医書 「ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝのための画像の読み方」ﾒﾃﾞｨｶﾙﾋﾞｭｰ

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容	担当教員
1	MMT概要	塩澤　崇
2	上肢1　肩	〃
3	上肢1　肩	〃
4	上肢2.3　肘　前腕　手関節	〃
5	上肢4　肩甲骨	〃
6	上肢4　肩甲骨	〃
7	練習　上肢	〃
8	下肢1　股関節	〃
9	下肢2　膝関節　足関節	〃
10	下肢3　体幹　表情筋	〃
11	練習　下肢	〃
12	OSCE（MMT）	〃
13	OSCE（MMT）	〃
14	画像評価実習（脳血管疾患、骨・関節疾患、胸部・腹部疾患）	〃
15	画像評価実習　発表	〃
16	筋緊張の検査法、反射の検査法；深部腱反射・表在反射・病的反射	木島　　隆
17	〃	〃
18	OSCE（筋緊張検査、反射検査）	〃
19	〃	〃
20	姿勢反射の検査法、協調性の検査法	〃
21	〃	〃
22	OSCE（姿勢反射、協調性）	〃
23	〃	〃
24	感覚検査法；体性感覚、疼痛の評価法	〃
25	〃	〃
26	OSCE（感覚検査、疼痛評価）	〃
27	〃	〃
28	片麻痺運動機能検査	〃
29	OSCE（片麻痺機能検査）	〃
30	臨床推論	〃

理学療法評価学

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
臨床評価学	藤堂庫治	☑ 理学療法士として病院において10年以上の臨床経験があり、その経験を基に授業を行う。	1単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
機器を用いた評価では、身体能力を正確に測定し、数値化された結果を客観的に評価することができる。 授業では、できる限り多くの学生が被験者を体験できるように進行する。グループ単位で各種検査機器を操作して測定する。その結果を評価する。さらに、生理学的、運動学的に機序を考察してレポートにまとめる。	２年次	後期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義・実技	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
身体機能を正確に測定することができる 得られた結果を評価することができる 評価結果を生理学的、運動学的に説明することができる	骨格筋の種類と特徴、ワッサーマンの歯車、エネルギー産生機構、運動に対する呼吸、循環器の生理学的応答、正常歩行の運動学、てこの原理を事前に復習する。
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
機器を用いた評価は、機器を用いて評価し、評価する。 その理由を生理学的、運動学的に説明する。 グループごとに評価した結果をレポートで提出する。	機器を用いた評価が授業時間内に終了しない場合、時間外まで実施する
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
定期試験とレポート課題、出席及び授業へ取組む姿勢を総合的に評価する。 定期試験30%　レポート60%　出席と授業に取り組む姿勢10%	「理学療法評価学（改訂第6版）」　(株)金原出版 「標準理学療法学　運動療法学総論」　医学書院

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

	授業内容
1	オリエンテーション、機器の使用方法に関する説明
2	
3	呼吸負荷試験、筋電図（１）床反力、動作解析（１）
4	
5	
6	
7	
8	
9	呼吸負荷試験、筋電図（２）床反力、動作解析（２）
10	
11	
12	
13	
14	
15	定期試験・まとめ

理学療法評価学

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
理学療法評価学実習	村松　秀明　他	☑ 全教員が理学療法士として病院等における臨床経験、実習指導の経験があり、その経験を基に授業を行う。	1単位 / 45時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
これまでに学んだ知識をもとに、ﾊﾞｲﾀﾙｻｲﾝ、形態、関節可動域、筋力などの検査・測定方法や、精神機能・運動機能に関する神経学的検査などの理学療法評価法を、学内外の医療機関における実際の患者を対象に実施し、評価結果に基づいて問題点の抽出と理学療法ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑの立案についての実際を学ぶ。また、行った理学療法やその他を記述・報告し、発展的に思考していくための基本的な知識を身につける。 さらに評価実習に向けて、知識の整理と正確でスムーズな評価の実施を目標に、課題などを通じてレベルアップを目指す。	２年次	後期
	【授業形態】	【履修区分】
	実技・実習	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
対象者に必要な検査測定項目を根拠を持って選択できる。 必要な情報収集ができるよう方法を考えることができる。 得られた情報・評価結果を記録用紙等に記載できる。 得られた情報・評価結果を適切な形でレポートにまとめられる。 評価結果に基づいて問題点の抽出、統合と解釈、理学療法プログラムの立案ができる。	実習では学校指定の実習着・実習靴を使用する。
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
グループ単位で担当教員毎に分かれて、学外の医療機関で評価実習を行う。 また、実習終了後に症例報告書を作成し、担当教員と共にグループ毎のフィードバックや症例検討を行う。 学内実習では、評価技術向上のための実技実習を行う。	一般的検査方法、動作観察などを復習しておくこと。また病態解釈のための情報収集方法をまとめておくこと。
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
下記の割合と実習中の取り組み姿勢を総合的に評価する。 OSCE40%、レポート30%、報告会20%、期末試験10% ※実習中の姿勢、提出物の期限遅延により、減点を行う。	適宜資料を配布する。

【授業計画（各回のテーマ・ｺﾏ数・内容）】

ｺﾏ数	授業内容
1	各施設での評価実施　及び　レポート作成 校内での実技練習　及び　実技試験
2	〃
3	〃
4	〃
5	〃
6	〃
7	〃
8	〃
9	〃
10	〃
11	〃
12	〃
13	〃
14	〃
15	〃
16	〃
17	実習報告会
18	〃
19	mini OSCE
20	〃
21	〃
22	〃
23	期末試験・まとめ
24	
25	
26	
27	
28	
29	
30	

理学療法治療学

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
骨関節機能障害学Ⅰ	吉澤　利夫　他	☑ どの教員も理学療法士として病院等における臨床経験があり、その経験を基に授業を行う。	2単位 / 60時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
理学療法の対象となる代表的な運動器疾患の基礎を学習し、基本的な理学療法評価から治療方法・技術を理解し実施する。それぞれでは、運動学、解剖学、整形外科学の知識を確認し、習得することも目的とする。また、グループに分かれ、各運動器疾患についての疾患、特徴、障害、評価、リハビリテーションなどについてまとめ、運動療法の実際を発表し確認する。	２年次	前期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義・実技	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
・各運動器疾患の症状、特徴を説明できる。 ・各疾患に対する理学療法評価を選択できる。 ・各疾患に対する理学療法プログラムが説明できる。 ・各疾患に対する運動療法が実施できる。	・積極的に授業参加をすること。 ・実技時は身だしなみを整え、動きやすい服装で参加すること。
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
・ﾊﾟﾜｰﾎﾟｲﾝﾄと教科書、配布資料を基に講義・実技を行う。 ・実技ではデモンストレーション後、学生同士で実践する。	シラバスを確認し、講義前に解剖学、運動学、疾患学の予習をすること。また、配布資料を基に復習と整理が必要である。
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
中間試験及び出席及び授業に取組む姿勢などから総合的に評価し、60点以上を合格とする。 中間試験30%　期末試験②60% 授業に取り組む姿勢及び出席状況10%	「標準理学療法学　運動療法学各論」 医学書院 「整形外科理学療法の理論と技術」 メジカルビュー

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容	担当教員
1	整形外科基礎知識:①	吉澤　利夫
2	整形外科基礎知識:②	〃
3	運動器の評価、運動器の検査法:①	〃
4	運動器の評価、運動器の検査法:②	〃
5	整形外科的治療法:保存療法	〃
6	整形外科的治療法:手術療法	〃
7	炎症性疾患	〃
8	代謝・内分泌性疾患	〃
9	退行性疾患、先天性骨・関節疾患	〃
10	循環障害と壊死性疾患	〃
11	中間試験	〃
12	神経・筋疾患	〃
13	骨・軟部腫瘍	〃
14	脊椎疾患	〃
15	骨折（上肢・体幹）	〃
16	骨折（下肢）	塩澤　崇
17	脊髄損傷、関節における外傷性疾患①	〃
18	脊髄損傷、関節における外傷性疾患②	〃
19	末梢神経における外傷性疾患	〃
20	スポーツ障害	〃
21	熱傷、切断および離断	〃
22	老年期疾患	〃
23	期末試験・まとめ	〃
24	スペシャルテスト（頚部、体幹①）	藤堂 庫治
25	スペシャルテスト（上肢①）	〃
26	スペシャルテスト（上肢②）	〃
27	スペシャルテスト（上肢③）	〃
28	スペシャルテスト（下肢①）	〃
29	スペシャルテスト（下肢②）	〃
30	スペシャルテスト 期末試験	〃

理学療法治療学

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
骨関節機能障害学Ⅱ	吉澤　利夫　他	☑ どの教員も理学療法士として病院等における臨床経験があり、その経験を基に授業を行う。	2単位 / 60時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
理学療法の対象となる代表的な運動器疾患の基礎を学習し、基本的な理学療法評価から治療方法・技術を理解し実施する。それぞれでは、運動学、解剖学、整形外科学の知識を確認し、習得することも目的とする。また、グループに分かれ、各運動器疾患スポーツ分野についての疾患、特徴、障害、評価、リハビリテーションなどについてまとめ、運動療法の実際を発表し確認する。	２年次	後期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義・実技	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
・各運動器疾患の症状、特徴を説明できる。 ・各疾患に対する理学療法評価を選択できる。 ・各疾患に対する理学療法プログラムが説明できる。 ・各疾患に対する運動療法が実施できる。	・積極的に授業参加をすること。 ・実技時は身だしなみを整え、動きやすい服装で参加すること。
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
・ﾊﾟﾜｰﾎﾟｲﾝﾄと教科書、配布資料を基に講義・実技を行う。 ・実技ではデモンストレーション後、学生同士で実践する。	シラバスを確認し、講義前に解剖学、運動学、疾患学の予習をすること。また、配布資料を基に復習と整理が必要である。
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
中間試験及び定期試験、発表、出席及び授業に取組む姿勢などから総合的に評価し、60点以上を合格とする。 定期試験70%　中間試験①10%　中間試験②10% 授業に取り組む姿勢及び出席状況10%	「標準理学療法学　運動療法学各論」 医学書院 「整形外科理学療法の理論と技術」 メジカルビュー

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容	担当教員
1	骨折・脱臼	吉澤　利夫
2	骨折・脱臼	〃
3	脊椎疾患（脊柱管狭窄症、ﾍﾙﾆｱなど）	塩澤　崇
4	脊椎疾患（脊柱管狭窄症、ﾍﾙﾆｱなど）	〃
5	脊椎疾患（腰痛症、側弯症、頸椎症など）	〃
6	脊椎疾患（腰痛症、側弯症、頸椎症など）	〃
7	中間テスト	吉澤　利夫
8	関節リウマチ	〃
9	関節リウマチ	〃
10	肩関節疾患（肩関節周囲炎、腱板損傷など）	塩澤　崇
11	肩関節疾患　実技	〃
12	末梢神経障害	〃
13	末梢神経障害	〃
14	中間テスト	吉澤　利夫
15	変形性関節症	〃
16	変形性関節症	〃
17	靭帯損傷、半月板損傷（膝・足関節）	〃
18	画像の診方	〃
19	画像の診方	〃
20	切断および離断	〃
21	高齢者の理学療法　ﾛｺﾓﾃｨﾌﾞｼﾝﾄﾞﾛｰﾑ	〃
22	アスレティックリハビリテーション①	藤堂　庫治
23	アスレティックリハビリテーション②	〃
24	アスレティックリハビリテーション③	〃
25	アスレティックリハビリテーション④	〃
26	アスレティックリハビリテーション⑤	〃
27	アスレティックリハビリテーション⑥	〃
28	テーピング	〃
29	テーピング	〃
30	期末テスト・まとめ	塩澤　崇

理学療法治療学

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
脳神経機能障害学Ⅰ	木島　隆　他	☑ どの教員も理学療法士として病院等における臨床経験があり、その経験を基に授業を行う。	2単位 / 60時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
中枢神経疾患による障害の特徴は、運動麻痺、協調性障害、感覚障害、高次脳機能障害などにより質的な運動の制御が困難な状態を示すものである。この授業では、代表的な中枢神経疾患を例に、姿勢や動作の観察及び考察を行いながら、その評価及び治療について講義する。 脳神経内科学で学んだ知識を再確認しながら理学療法の対象となる方の障害像を理解する。	２年次	前期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義・実技	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
中枢神経疾患のメカニズムを学び病態の出現過程と治癒過程を説明できる。 病態や病期に対応した治療方法を提案でき、実践できる。 脊髄損傷の損傷レベルによる症状の違いを理解し、評価結果を解釈することができる。	

【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
パワーポイントと資料を用いて概要を説明したのち、調べ学習を個人または班に分かれて行う。実際に皆の前で調べた考えを発表する。	運動学・解剖学・生理学・神経内科学の教科書も参考にしながら復習を中心に行うこと。

【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
定期試験、出席及び授業へ取り組む姿勢を総合的に評価する。 定期試験90%　　出席及び授業へ取り組む姿勢10%	「病気が見える７脳・神経」ﾒﾃﾞｨｯｸﾒﾃﾞｨｱ 「標準理学療法学　運動療法学各論」　医学書院

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容	担当教員
1	中枢神経疾患の基礎知識；脳の機能（解剖）	木島　隆
2	中枢神経疾患の基礎知識；神経症候学（意識障害・頭痛・頭蓋内圧亢進・脳浮腫）	〃
3	中枢神経疾患の基礎知識；錐体路徴候・錐体外路徴候	〃
4	中枢神経疾患の基礎知識；感覚障害・運動失調	〃
5	中枢神経疾患の基礎知識；高次脳機能障害総論	〃
6	中枢神経疾患の基礎知識；高次脳機能障害各論	〃
7	〃	〃
8	脳血管障害の基礎知識	〃
9	〃	〃
10	中枢神経変性疾患の基礎（パーキンソン、SCD、脳腫瘍等）	〃
11	〃	〃
12	〃	〃
13	〃	〃
14	〃	〃
15	〃	〃
16	末梢性ニューロパチーの基礎知識	小野　佳子
17	〃	〃
18	その他の変性疾患の基礎知識	〃
19	〃	〃
20	運動ニューロン疾患・筋原性疾患の基礎知識	〃
21	〃	〃
22	脊髄損傷の概要、基礎知識（解剖学、生理学、画像）	藤堂　庫治
23		〃
24	部分損傷別の症状 呼吸障害、起立性低血圧、自律神経過反射、熱中症・低体温症、排尿・排便障害	〃
25		〃
26		〃
27		〃
28	摂食・嚥下；メカニズム、摂食・嚥下障害の評価と治療	〃
29	〃	〃
30	定期試験・まとめ	〃

理学療法治療学

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
脳神経機能障害学Ⅱ	木島　隆　他	☑ どの教員も理学療法士として病院等における臨床経験があり、その経験を基に授業を行う。	2単位 / 60時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
中枢神経疾患による障害の特徴は、運動麻痺、協調性障害、感覚障害、高次脳機能障害などにより質的な運動の制御が困難な状態を示すものである。この授業では、代表的な中枢神経疾患を例に、姿勢や動作の観察及び考察を行いながら、その評価及び治療について講義する。 神経内科学で学んだ知識を再確認しながら理学療法の対象となる方の障害像を理解する。その上で評価の目的、その実施とその結果に対する解釈、評価項目間の統合を理解する。統合した結果から、問題点を抽出し、目標設定、治療計画の立案ができることを目標とする。	２年次	後期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義・実技	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
中枢神経疾患のメカニズムを学び病態の出現過程と治癒過程を説明できる。 病態や病期に対応した治療方法を提案でき、実践できる。 最新の脳卒中の治療方法を理解し、説明することができる。 脊髄損傷の損傷レベルによる症状の違いを理解し、評価結果を解釈することができる。	実技を行うので運動をできる服装で講義に参加すること
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
パワーポイントと資料を用いて概要を説明したのち、調べ学習を個人または班に分かれて行う。実際に皆の前で調べた考えを発表する。	運動学・解剖学・生理学・神経内科学の教科書も参考にしながら復習を中心に行うこと。
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
定期試験、出席及び授業へ取り組む姿勢を総合的に評価する。 定期試験90%　　出席及び授業へ取り組む姿勢10%	「ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝのための画像の読み方」ﾒﾃﾞｨｶﾙﾋﾞｭｰ 「病気が見える７脳・神経」ﾒﾃﾞｨｯｸﾒﾃﾞｨｱ 「標準理学療法学　運動療法学各論」　医学書院

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容	担当教員
1	脳卒中の回復過程；中枢性障害の回復過程と特徴	木島　隆
2	脳卒中の評価と治療；運動機能障害と検査、評価（画像含む）と治療の過程	〃
3	〃	〃
4	高次脳機能障害の評価	〃
5	脳卒中の評価と治療；脳血管障害の理学療法（急性期）	〃
6	〃	〃
7	脳卒中の評価と治療；脳血管障害の理学療法（回復期）	〃
8	〃	〃
9	脳卒中の評価と治療；脳血管障害の理学療法（維持期）	〃
10	歩行；脳卒中片麻痺患者の歩行分析・評価	高井 浩之
11	〃	〃
12	装具療法；脳卒中片麻痺の装具療法	〃
13	〃	〃
14	ニューロリハビリテーション	鵜飼　正二
15	〃	〃
16	頭部外傷；頭部外傷のリハビリテーション（画像評価含む）	〃
17	〃	〃
18	パーキンソン病の理学療法	小野　佳子
19	脊髄小脳変性症の理学療法(実技を含む)	〃
20	運動ニューロン疾患の病態と理学療法	〃
21	運動ニューロン疾患の理学療法	〃
22	脱髄性疾患・多発性筋炎・重症筋無力症の理学療法	〃
23	神経生理学的治療法の変革、概念と治療	木島　隆
24	神経生理学的治療法の実際（PNF、ボバース法等）	〃
25	頚髄損傷の理学療法；頸損のADL（車椅子の選択、起居動作、移乗動作を中心に）	藤堂　庫治
26	頚髄損傷の理学療法；頸損のADL（車椅子の選択、起居動作、移乗動作を中心に）	〃
27	頚髄損傷の理学療法；頸損のADL（車椅子の選択、起居動作、移乗動作を中心に）	〃
28	頚髄損傷の理学療法；頸損のADL（車椅子の選択、起居動作、移乗動作を中心に）	〃
29	脊髄損傷の理学療法；L2、L4、S1の装具、杖、歩行	〃
30	脊髄損傷の理学療法；臥位、車椅子座位での褥瘡予防（身体操作、体圧測定）	〃
31	定期試験・まとめ	〃

理学療法治療学

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
内部機能障害学Ⅰ	小野　佳子　他	☑ どの教員も理学療法士として病院等における臨床経験があり、その経験を基に授業を行う。	1単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
内部障害として、心疾患、呼吸器疾患に対するﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝはすでに歴史がありその有効性も明らかになってる。その他、生活習慣病である高血圧、糖尿病、高脂血症に対しても運動療法の有効性が示されている。また、がん疾患リハビリテーションについての知識も求められている。2学年前期に学んだ「内科学」の知識を基に、理学療法に関連の深い内部疾患について、障害像の把握、理学療法評価とのつながりを理解できるようにする。	２年次	前期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義・実技	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
呼吸器、循環器、代謝疾患やがん等の内部障害の特徴を説明できる。 それぞれの疾患に対する評価の選択をし、理学療法との関連性について理解できる。	基本的知識を活用して、疾患と理学療法のつながりを理解できるよう能動的に学ぶこと。 共同学習では責任を持って取り組むこと。

【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
教科書、配布資料、パワーポイント等により講義する。 調べ学習、発表等も含め、共同学習も行う。 講義時間内に小テストを実施することもある。	疾患等について「内科学」や「神経内科学」の講義内容を復習すること。呼吸系、循環系、代謝系の解剖生理についても復習すること。宿題を出すこともある。

【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
受講態度10%（出席、態度、宿題、等） 定期試験90%	「標準理学療法学　運動療法学各論」　医学書院 「理学療法学テキスト　内部障害理学療法学」メジカルビュー社

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容	担当教員
1	循環器の基礎知識	小野　佳子
2	循環器疾患の病態、評価、心電図	〃
3	〃	〃
4	〃	〃
5	末梢循環障害の病態、評価	〃
6	呼吸器の基礎知識	〃
7	呼吸器疾患の病態、評価	〃
8	〃	〃
9	〃	〃
10	糖尿病に関する基礎知識	吉澤　利夫
11	糖尿病の病態、評価	〃
12	腎疾患に関する基礎知識	〃
13	腎疾患の病態、評価	〃
14	がん　概論	小野　佳子
15	期末試験、まとめ	〃

理学療法治療学

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
内部機能障害学Ⅱ	小野　佳子　他	☑ どの教員も理学療法士として病院等における臨床経験があり、その経験を基に授業を行う。	2単位 / 60時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
内部障害として、心疾患、呼吸器疾患に対するﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝはすでに歴史がありその有効性も明らかになってる。その他、生活習慣病である高血圧、糖尿病、高脂血症、腎疾患に対しても運動療法の有効性が示されている。また、がん疾患リハビリテーションについての知識も求められている。 各疾患の特徴や経過、状態の変化に応じた理学療法を展開できることが必要であり、基本的な理学療法治療技術とその応用性について学ぶ。	２年次	後期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義・実技	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
呼吸器、循環器、代謝疾患その他内部疾患の特徴を説明できる。 それぞれの疾患に対する評価、理学療法の目的、内容や注意事項について理解し、基本的な実技を行える。	基本的知識を活用して、疾患と理学療法のつながりを理解できるよう能動的に学ぶこと。 共同学習では責任を持って取り組むこと。 実技の際は動ける服装で、積極的に練習すること。
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
教科書、配布資料、パワーポイント等により講義する。 調べ学習、発表等も含め、共同学習も行う。 講義時間内に小テストを実施することもある。実技も行う。	疾患等について「内科学」「内部機能障害学Ⅰ」の講義内容を復習すること。呼吸器系、循環器系その他の解剖生理についても復習すること。宿題を出すこともある。
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
受講態度10%（出席、態度、宿題、等） 中間試験1　15%　中間試験2　15% 中間試験3　15%　期末試験　45%	「標準理学療法学　運動療法学各論」　医学書院 「理学療法学テキスト 内部障害理学療法学」メジカルビュー社

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容	担当教員
1	呼吸器系理学療法；病態、評価、理学療法	小野　佳子
2	〃	〃
3	〃	〃
4	〃	〃
5	呼吸器系理学療法；実技	〃
6	〃	〃
7	呼吸器系理学療法；症例検討、グループワーク	〃
8	〃	〃
9	呼吸器系理学療法；症例検討、発表	〃
10	呼吸器系まとめ　中間試験１	〃
11	循環器疾患の各論	大見　朋哲
12	〃	〃
13	循環器疾患の評価、リハビリテーション	〃
14	〃	〃
15	包括的心臓リハビリテーション、実技	〃
16	〃	〃
17	末梢循環障害の病態、評価	小野　佳子
18	〃	〃
19	循環器疾患の理学療法まとめ	〃
20	循環器系まとめ　中間試験２	〃
21	糖尿病の病態、評価、理学療法	吉澤　利夫
22	〃	〃
23	〃	〃
24	〃	〃
25	腎疾患の病態、評価、理学療法	〃
26	〃	〃
27	〃	〃
28	がんの理学療法	小野　佳子
29	〃	〃
30	糖尿病・腎疾患・がんの理学療法まとめ　　中間試験３	吉澤　利夫
31	期末試験	小野　佳子

理学療法治療学

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
発達機能障害学	鈴木　芳則　他	☑ どの教員も理学療法士として小児施設に勤務しており、その経験を基に授業を行う。	1単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
小児疾患に対する運動療法について学習する。小児期は、解剖学的にも発育・発達途上の時期であり、年齢によって状態が異なるだけでなく、障害像も大きく変化しやすい時期である。小児疾患は脳性麻痺を代表とする中枢神経疾患、骨関節疾患と幅広く、先天性疾患の他、中途障害の場合もある。そこで運動学、生理学、症候学、評価、義肢装具などの基礎知識をふまえながら、障害特性に対応した評価・治療を総合的に組み立てることを学習することが必要である。また小児期は保護者への説明や指導も欠かすことができない。このような点から育児学や保護者の精神状態を考慮し、家庭教育についても学習する。	２年次	後期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義・実技	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
脳性麻痺に関する概要を理解する。 脳性麻痺の尺度・評価・分類などを理解し説明することができる。 小児に対する一般的理学療法について理解する。 小児整形外科・重度心身障害児に対する理学療法を理解し説明ができる。	実技を行うときは運動をできる服装で講義に参加すること
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
パワーポイントと資料を用いて概要を説明する。DVDなどの映像を用いて症例のイメージを持つようにする。また、実技も行いグループなどで討論もしていく。	復習を中心に行うと良い
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
定期試験、出席及び授業へ取り組む姿勢を総合的に評価する。 定期試験90%　　出席及び授業へ取り組む姿勢10%	「イラストでわかる小児理学療法」　医歯薬出版

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容	担当教員
1	脳性麻痺（ADL・分類・評価尺度）	鈴木芳則
2		〃
3	低出生体重児・ハイリスク児・発達障害	〃
4		〃
5	脳性麻痺（概略、痙直型両麻痺・四肢麻痺）	石川　智之
6		〃
7	小児理学療法の特殊性	鈴木芳則
8		〃
9	デュシャンヌ型ジストロフィー・ダウン症候群	〃
10		〃
11	脳性麻痺（アテトーゼ型・痙直型片麻痺）	石川　智之
12		〃
13	小児整形疾患・重症心身障害児	〃
14		〃
15	定期試験・まとめ	〃

理学療法治療学

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
物理療法学Ⅰ	藤堂　庫治	☑ 理学療法士として病院において10年以上の臨床経験があり、物理療法機器を用いた治療にも従事していた。	1単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
物理療法とは、電気・温熱・寒冷・水・光線・力などの物理エネルギーを生体に適用することによって、疼痛、筋スパズムの緩解、循環の改善、筋力低下などの改善を図ろうとする治療法である。物理療法の意義や目的を知り、使えるようになることを目指す。 物理療法学Ⅰでは、温熱療法と寒冷療法について、治療方法やその適応と禁忌について学ぶ。	1年次	後期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義・実技	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
温熱刺激による生理学的反応を説明することができる 物理療法機器を使用することができる 禁忌の理由を説明することができる	分からないことは積極的に質問すること。 実技は動きやすい服装で参加すること。

【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
物理療法機器を用いて使用方法を習得する 温熱療法の特性を理解する 温熱による作用、禁忌の理由を説明することができる	生理学を復習すること

【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
定期試験、課題、出席及び授業へ取組む姿勢を総合的に評価する。 定期試験80%　発表10%　出席及び授業へ取組む姿勢10%	シンプル理学療法シリーズ 物理療法学テキスト　南江堂

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

コマ数	授業内容
1	温熱療法総論
2	ヒートパック・パラフィン
3	遠赤外線療法、近赤外線療法
4	極超短波療法、超短波療法
5	超音波療法、イオンフォノフォレーシス、コンビネーション治療
6	ランバートの法則、逆二乗の法則、物理療法の考え方
7	温熱療法実技（1回目）①
8	温熱療法実技（1回目）②
9	中間試験・解説
10	中間試験復習（グループ学習）
11	温熱療法実技（2回目）①
12	温熱療法実技（2回目）②
13	寒冷療法
14	寒冷療法実技
15	期末試験・まとめ

理学療法治療学

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
物理療法学Ⅱ	藤堂　庫治	☑ 理学療法士として病院において10年以上の臨床経験があり、物理療法機器を用いた治療にも従事していた。	1単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
物理療法学Ⅱでは、「電気療法」 「光線療法（赤外線以外）」 「水治療法」 「力学的機器を用いた治療法」 の理論と機器の操作方法や操作手順を学習し、実際に使用できるようにする。 また、治療による身体的変化についての考察や、リスク管理が出来るようになる。	２年次	前期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義・実技	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
物理的刺激による生理学的反応が分かる 各種治療法の特徴が分かる 各種治療法を実施することができる 禁忌の理由を説明することができる	分からないことは積極的に質問すること。 実技は動きやすい服装で参加すること。
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
動画で機器の取り扱い方を覚える パワーポイントの説明に従って温熱療法の特性を理解する	生理学を復習すること
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
定期試験、課題、出席及び授業へ取組む姿勢を総合的に評価する。 定期試験70%　確認テスト10%　出席及び授業へ取組む姿勢20%	シンプル理学療法シリーズ 物理療法学テキスト　南江堂

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容
1 2	光線療法、水治療法
3 4	電気的治療法
5 6	牽引療法
7 8	物理療法実技
9	確認テスト
10 11 12 13	グループ学習
14	まとめ
15	定期試験・総括

理学療法治療学

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
義肢装具学Ⅰ	齋藤　文樹	□	1単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
義肢学とは、四肢の物質的な欠損を代償するもので、切断を対象とする義肢は、四肢の疾患や機能障害を対象とする装具とは明確に区分される。義肢は切断に密着する、複数の機能を持つ、人間の四肢に近い外観を持つ、連続的に装着使用されるといった条件を備えていなければならない。また義肢の機能は、材料、構造、制御機構などの進歩により、切断部位によっては、日常生活やスポーツ競技などの趣味に至るまで、健常人と全く差が無いところまで機能的回復が可能となった。そのため適切な理学療法や義肢の処方適合が重要である。ここでは切断患者に対する理学療法士の役割、義肢の目的、種類、アライメント、適合チェック、各種制度、申請の手続き等臨床の場に必要な知識、技術を学んでいくことを目標とする。	２年次	前期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義・実技	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
義肢の定義・歴史・目的・原理を理解する. 切断の原因，切断術と断端の管理を理解する. 義肢の種類，構造，機能，材料，製作過程，適合判定を理解する. 切断者の理学療法を理解する.	積極的に取り組むこと。
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
講義を中心に進めていく。	配布資料を基に復習が必要。
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
定期試験、出席及び授業へ取り組む姿勢を総合的に評価する。 定期試験90%　　出席及び授業へ取り組む姿勢10%	「義肢装具のチェックポイント」　医学書院

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容	担当教員
1	総論；切断と義肢の歴史 （切断の原因・疾患、切断者の心理、切断術と切断部位　切断手技）	齋藤文樹
2	断端管理方法	〃
3	下腿義足；構成要素　ソケット　懸垂装置　アライメント	〃
4	〃	〃
5	〃	〃
6	大腿義足；構成要素　ソケット　アライメント	〃
7	〃	〃
8	その他の義足；股義足　膝義足　サイム義足	〃
9	義足の処方；義足の処方と適合判定	〃
10	義手；種類　適応　チェックアウト	〃
11	異常歩行とその対策	〃
12	〃	〃
13	評価・管理法；切断の手術前後の評価	村松秀明
14	切断の理学療法；治療プログラム、手技、生活指導	〃
15	定期試験・まとめ	齋藤文樹

理学療法治療学

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
義肢装具学Ⅱ	青柳　省吾	☑ 理学療法士として病院において7年の臨床経験があり、福祉用具の選定や住宅改修等も行っていた。	1単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
装具学は障害の種類に関わらず、理学療法の重要なアプローチの一つであり、リハビリテーション医療の中で極めて大きな役割を果たしている。授業では装具の定義、歴史から各種装具の原理と適応を学習する。装具について医師や義肢装具士などに十分な議論を交わすことのできる能力を身につけることを目指す。 装具の目的およびアライメント調整等、処方から適合チェックまでの過程から代表的な脳血管疾患や整形疾患に対する装具処方概要を簡単に説明できるまでを理解することを目標とする。	２年次	後期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義・実技	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
装具の定義，歴史，目的，原理を理解する． 各補装具の種類・構造・機能を理解する． 補装具の処方と適合判定ができるようになる． 効果的な補装具の活用方法を理解する．	実技の際は運動のできる服装で受講すること その他、講師の指示に従うこと
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
装具の種類や特徴について、講義と実技、グループワークを交えながら 学び、理学療法への適応へと結び付けていく。	配布資料を基に復習が必要。
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
定期試験、出席及び授業へ取り組む姿勢を総合的に評価する。 定期試験90%　　出席及び授業へ取り組む姿勢10%	「義肢装具のチェックポイント」　医学書院

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容	担当教員
1	装具について；装具学概論	青柳省吾
2	装具の名称と分類・各種装具・靴型装具など	〃
3	〃	〃
4	各種装具について；上肢装具	〃
5	〃	〃
6	各種装具について；体幹装具	〃
7	〃	〃
8	各種装具について；下肢装具	〃
9	〃	〃
10	〃	〃
11	装具と理学療法　　（評価と治療）	〃
12	〃	〃
13	〃　　（歩行補助具）	〃
14	〃　　（車椅子・シーティング）	〃
15	定期試験・まとめ	〃

理学療法治療学

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】		【単位数/授業時数】
日常生活活動論Ⅰ	青柳　省吾	☑	理学療法士として病院において7年の臨床経験があり、福祉用具の選定や住宅改修等も行っていた。	1単位　/　15時間

【授業の概要（内容）と目的】

日常生活活動論では、我々が普段意識することなく行っている日常生活が、理学療法において重要な評価・介入対象であることを学ぶ。日常生活活動の概念を理解し、理学療法士として専門的な視点における日常生活の捉え方を学ぶ。
また、日常生活活動を分析する基礎知識と技術を習得し、適切な援助や介助方法、生活に役立つ社会福祉機器や補助具、車いすの適応と使用方法等を学ぶ。

【履修年次】	【開講学期】
１年次	後期
【授業形態】	【履修区分】
講義・実技	必修

【授業の到達目標】

・日常生活活動の定義や概念を理解し、説明できるようになる。
・代表的な ADL 評価方法を理解し、説明できるようになる。
・代表的な自助具や福祉機器について理解し、操作ができるようになる。
・ADL指導に必要な基本的動作、姿勢について理解できる。

【履修上の注意事項】

実技は、動きやすい服装で参加してください。（ジャージの上下など）

【授業の方法】

日常生活活動の基本的な内容について、教科書、パワーポイント、配布資料にて講義後、実技にて動作介助方法、福祉機器、車椅子、歩行補助具などの目的使用方法を学ぶ。

【授業時間外学修（予習・復習等）】

新たな専門用語が多く出てくるので、講義後の復習が重要。

【成績評価の方法と基準】

定期試験、課題提出、出席及び授業へ取り組む姿勢を総合的に評価する。
定期試験90％　課題5%　出席及び授業へ取り組む姿勢5％

【教科書・参考書】

「標準理学療法　日常生活活動学・生活環境学」　医学書院

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

コマ数	授業内容
1	ADLの概念、範囲
2	ADLの評価（BI、FIM、その他の評価）
3	ADL支援機器～自助具・補助具～
4	ADL支援機器～歩行補助具～
5	ADL支援機器～車椅子～
6	ADLの運動学的分析
7	ADL支援機器（グループワーク）
8	定期試験・まとめ

理学療法治療学

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
日常生活活動論Ⅱ	青柳　省吾	☑ 理学療法士として病院において7年の臨床経験があり、福祉用具の選定や住宅改修等も行っていた。	2単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
日常生活活動論Ⅱでは、日常生活活動の概念と評価法を理解し、健常者と各疾患別障害の日常生活活動・生活関連動作の違いを理解する。各疾患の特性を踏まえ、対象者に対して適切な動作指導や介助技術を学ぶ。姿勢と動作の基礎知識、日常生活に関わる動作を理解し、それらの動作・介助方法を学ぶ。 車いす・ベッドの適応、福祉機器の適応知識と動作介助法を学習する。	２年次	前期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義・実技	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
・各疾患患者に対する介助方法を理解し、模倣することができる。 ・各疾患患者に対する動作指導を理解し、説明することができる。 ・動作指導・運動学習の視点から適切な介助法を理解し、安全に実践することができる。 ・車椅子や歩行補助具の特性を理解し安全に指導・操作ができる。	実技は、動きやすい服装で参加してください。（ジャージの上下など）
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
教科書、パワーポイント、配布資料を用いて概要を説明したのち、実技を行う。	1年次に学んだ内容を復習しておくこと。疾患によって生じる臨床症状に合わせた動作介助方法・指導方法を学ぶため、各疾患の病態について復習し、講義を受けることが望ましい。
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
定期試験、課題提出、出席及び授業へ取り組む姿勢を総合的に評価する。 定期試験80%　課題10%　出席及び授業へ取り組む姿勢10%	「標準理学療法　日常生活活動学・生活環境学」　医学書院

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

コマ数	授業内容
1	FIM採点方法（グループワーク）
2	〃　発表
3	ベッドポジショニング
4	車いすの選択・処方 ～シーティング～
5	基本的動作介助法
6	歩行補助具による歩行
7	ADL各論：片麻痺 ①
8	片麻痺 ②
9	ADL各論：脊髄損傷
10	ADL各論：関節リウマチ、人工股関節術後、下肢切断①
11	ADL各論：関節リウマチ、人工股関節術後、下肢切断②
12	ADL各論：呼吸器・循環器疾患
13	ADL各論：神経筋疾患
14	ADL各論：在宅生活、まとめ
15	定期試験・まとめ

理学療法治療学

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
理学療法技術論	小野　佳子　他	☑ 3名の教員が理学療法士として病院等において各授業内容に応じた臨床経験があり、その経験を基に授業を行う。	1単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
基本的理学療法知識をもとに、より専門的な運動療法などの技術を学ぶ。 各種治療手技によるアプローチについて、知識と技術を学び、身に付けることを目的とする。 また、理学療法士として喀痰吸引の技術も必要であるため、専門家から学ぶ機会とする。各専門分野で活躍する理学療法士等から、普段臨床で実践している経験をもとに直接教授してもらう。	２年次	前期・後期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義・実技	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
専門的理学療法を学び、基本的技術を修得し、臨床実習や将来の臨床現場での理解に役立てることができる。	実技の際は運動のできる服装で受講すること。 呼吸理学療法と喀痰吸引の実技は指定の実習着で受講すること。
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
教科書、配布資料、パワーポイント等により講義する。 実技を多く実施する。	運動器、呼吸器等について、基礎知識を復習しておくこと。講義内容を15分見直すこと。実技で習得した技術を積極的に練習することが望ましい。
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
受講態度10%（出席、態度） 期末試験（運動器疾患）60% レポート（呼吸理学療法　20%） （喀痰吸引　10%）	教科書　「積極的保存療法」文光堂 参考書　「医療スタッフのための痰の吸引　基礎と技術」学研

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

コマ数	授業内容	担当教員
1	運動器疾患に対する理学療法；上肢	岩谷友倫
2	〃	〃
3	〃	〃
4	〃	〃
5	運動器疾患に対する理学療法；下肢	〃
6	〃	〃
7	〃	〃
8	〃	〃
9	呼吸理学療法の知識と技術	原田　聡昭
10	〃	〃
11	〃	〃
12	〃	〃
13	喀痰吸引の基礎知識と技術	工藤　和子
14	〃	〃
15	定期試験、まとめ	小野　佳子

理学療法治療学

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
理学療法特論	村松　秀明　他	☑ どの教員も理学療法士として病院等において各授業内容に応じた臨床経験があり、その経験を基に授業を行う。	1単位 / 15時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
理学療法における基本的知識の整理と応用的知識を身につける。また、より高度な理学療法技術を学ぶことにより、将来、各分野への関心を持ち自ら学ぶ姿勢を身に付けることを目標とする。	3年次	通年
	【授業形態】	【履修区分】
	講義	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
・基本的な理学療法から応用される理学療法の意味を理解する ・経験し学んだ技術について基本的な知識を得る	実技の際は運動のできる服装で受講すること その他、講師の指示に従うこと
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
基本的な知識をもとに、より専門的な学習内容へ発展する。講義を中心に実技を交えながら進める。	・習得した実技は積極的に練習すること ・重要点を記録し、レポート作成を早めに行うこと
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
出席・受講状況　20% レポート（宮嶋先生分）40% レポート（小平先生分）40% 提出遅延は原点の対象となる	指定なし

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容	担当教員
1	脳における無意識の領域と患者の触り方の実践（仮）	宮嶋　　武
2	〃	〃
3	〃	〃
4	〃	〃
5	関節ファシリテーション	小平　健一
6	〃	〃
7	〃	〃
8	〃	〃

地域理学療法学

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
地域リハビリテーション論	塩澤　崇	☑ 理学療法士として病院において7年の臨床経験があり、地域ケア事業等にも従事していた。	2単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
地域リハビリテーションの理念を理解し、その活動の枠組みを学習する。またその活動の中で理学療法士が行う実践活動を理解する。 また介護予防の考え方やケアマネジメントなどについて理解を深め、地域リハビリテーションにおける理学療法の役割について理解する。	３年次	前期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義・実技	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
地域リハビリテーションについて説明できる。 地域における理学療法の位置づけと役割について説明できる。 地域リハに必要な制度および介護予防について説明できる。 対象者の特性に合わせたレクリエーションの企画ができる。	実技は、動きやすい服装で参加してください。（ジャージの上下など）
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
配布資料とパワーポイントにて、講義中心にすすめる	配布資料、教科書をもとに復習を行うこと
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
定期試験、出席及び授業へ取り組む姿勢を総合的に評価する。 定期試験80%　出席及び授業へ取り組む姿勢10%	「地域理学療法学」　医歯薬出版

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

コマ数	授業内容
1	総論；定義・社会的・歴史的背景
2	総論；地域リハビリテーションとは？
3	保健医療福祉システムの最新状況
4	福祉関連法的諸制度・社会資源
5	関連機関と地域連携
6	要介護認定とケアマネジメント
7	介護保険制度下での地域理学療法
8	在宅理学療法
9	〃
10	健康増進への取り組み
11	文献抄読
12	レクリエーション企画
13	レクリエーション
14	〃
15	定期試験・まとめ

地域理学療法学

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
生活環境論	青柳　省吾	☑ 理学療法士として病院において7年の臨床経験があり、福祉用具の選定や住宅改修等も行っていた。	1単位 / 30時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
生活環境論は障害者の人権、ノーマライゼーション、自立生活をその基本理念としている。すなわち障害者の生活を考えるとき、身体機能に対する評価・治療のみでは不十分であり、生活環境全般について理解する必要がある。授業では生活環境を関連法規、住居、設備、福祉、リハビリテーション関連機器、地域環境に分け、評価・治療計画等との関係を含めて学ぶ。また住宅の基本構造と建築図面の基礎について学び、臨床での住宅改造の提案や生活環境整備に役立てる。	３年次	前期
	【授業形態】	【履修区分】
	講義・実技	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
・現在日本における患者(利用者)の在宅環境(家屋、福祉用具等)を、医療保険、介護保険の現行制度を通して、リハビリテーションの視点で理解する。 ・各疾患、特性に合わせ、基本的な生活環境整備ができるようになる。 ・住宅の基本構造と建築図面の基礎について理解し、家屋構造・症例に合わせた住宅改造の提案ができる。	前回の資料を必ず見直すこと。 配布資料を忘れないこと。
【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
資料で説明後、グループでのディスカッションを行い、資料の作成・発表を行う。その発表でもディスカッションを行い知識と思考の共有を図る。	配布資料、教科書をもとに復習を行うこと
【成績評価の方法と基準】	【教科書・参考書】
定期試験、出席及び授業へ取り組む姿勢を総合的に評価する。 定期試験90%　出席及び授業へ取り組む姿勢10%	「標準理学療法学　日常生活活動学・生活環境学」医学書院 「福祉住環境ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ2級　テキスト」　日本能率協会ﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄｾﾝﾀｰ 「OT・PTのための住環境整備論」　三輪書店

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

ｺﾏ数	授業内容
1	生活環境学総論；生活環境学の概念
2	生活環境の評価と改善計画
3	生活環境と法的諸制度
4	生活環境としての住宅・住宅改修 ①
5	生活環境としての住宅・住宅改修 ②
6	住宅改修に関しての発表
7	地域環境と公共交通
8	高齢者の身体的特徴
9	高齢者の在宅生活サービス、症例に合わせたプラン・プログラム立案（グループワーク）①
10	高齢者の在宅生活サービス、症例に合わせたプラン・プログラム立案（グループワーク）②
11	高齢者の在宅生活サービス、プログラム立案（発表）①
12	高齢者の在宅生活サービス、プログラム立案（発表）②
13	生活を支える福祉、リハ関連機器
14	生活を支える福祉、リハ関連機器（グループワーク）
15	定期試験・まとめ

臨床実習

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】		【単位数/授業時数】
見学実習	塩澤　崇 他	☑	全教員が理学療法士として病院等における臨床経験、実習指導の経験があり、その経験を基に授業を行う。	1単位 / 45時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
今後の学習の動機付けを図り、リハビリテーション関連職種の一員として理学療法士の役割を学ぶ。見学を通しての医療関連職種としての様々な体験を、自らの理学療法士としての態度要請のための一助とする。また見学した病院・施設の運営方針、役割を理解する。実習期間中は、臨床実習施設において実習指導者のもとで、実践を通じて指導してもらいながら、理学療法士としての知識・技術を身につける。	1年次	後期
	【授業形態】	【履修区分】
	実習	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
社会人・医療人としての態度を養う 対象者との人間関係を構築できる 疾病、障害、ADL障害の理解、理学療法士の役割の理解、リスク管理の理解 対象者・障害者の諸問題を把握する 対象者・障害者の諸問題について考え、解決のため行うべきことを考える	社会（施設）での実習となるため、身嗜み、言葉使い、規則などが各施設によって異なることを意識し注意をする。実習では学校指定の実習着を使用する。

【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
実習前オリエンテーションで、注意事項を指導する。 5日間施設にて実習を行う。 実習終了後、パワーポイントにまとめた報告をする。 報告を聞き、学生間でディスカッションを行う。	血圧測定・脈拍測定・医療面接などの基礎技術や運動学などを復習しておくと良い。

【成績評価の方法と基準】	【参考書】
下記の割合と実習中の姿勢を総合的に評価する。 パワーポント24%、報告会の内容36%、提出物35%、出席5%	臨床実習の手引き

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

	授業内容
	実習前オリエンテーション（学内）：実習の目的、手順、心得、マナー、感染予防、個人情報などの指導をおこなう。また、チェックリスト、ディリーノート、出席表の書き方の指導を行う。 実習期間：臨床実習教育者の指導の下、解説、模倣、実施の原則に従い医療従事者として望ましい振る舞いで、症例に接する。（5日間） 訪問リハビリテーション・通所リハビリテーションも可能な限り経験する。
	実習報告会：パワーポイントを作成し発表を行う。学生間での意見交換を実施する。

臨床実習

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】		【単位数/授業時数】	
評価実習	青柳省吾　他	☑	全教員が理学療法士として病院等における臨床経験、実習指導の経験があり、その経験を基に授業を行う。	3単位 / 135時間	

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
授業で履修したことを、臨床教育者の下に実際に経験し、知識・技術の整理、確立を図る。検査・測定など、様々な情報収集から問題点把握、目標設定までの一連のプロセスについて学ぶ。 また理学療法士として必要な態度を身につけることや、社会や医療の中で理学療法士の役割について学ぶ。臨床実習教育者の下で基本的な評価方法を学ぶ。実習期間中は、臨床実習施設において実習指導者のもとで、実践を通じて指導してもらいながら、理学療法士としての知識・技術を身につける。	２年次	後期
	【授業形態】	【履修区分】
	実習	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
関連部門から必要な情報を収集できる。必要な検査測定項目を選択できる。 集められた情報・検査結果を説明できる。 集められた情報・評価結果を記録用紙等に記載できる。 教育者の立ち振る舞いをを理解し、模倣・実施できる。 教育者の検査・評価を理解し、模倣・実施ができる。	社会（施設）での実習となるため、身嗜み、言葉使い、規則などが各施設によって異なることを意識し注意をする。実習では学校指定の実習着を使用する。

【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
実習前オリエンテーションで、注意事項を指導する。 3週間施設にて実習を受ける。 実習後OSCEを行う。また、経験症例について報告書をまとめ、報告会を行い学生間で意見交換を行う。	一般的検査方法、動作観察などを復習しておくこと。また、病態解釈のための情報収集方法をまとめておくこと

【成績評価の方法と基準】	【参考書】
下記の割合と実習中の姿勢を総合的に評価する。 OSCE45%、報告書20%、報告会15%、提出物15%、出欠5%	臨床実習の手引き

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

	授業内容
	実習前オリエンテーション（学内）：実習の目的、手順、心得、マナー、感染予防、個人情報などの指導をおこなう。また、チェックリスト、ディリーノート、出席表の書き方の指導を行う。 実習期間：3週間の学外実習を実施する。 （課題内容：ディリーノート、チェックリスト、出席表の記入） 訪問リハビリテーション・通所リハビリテーションも可能な限り経験する。
	経験症例報告書の記入：A3用紙に決まった項目を記入する。
	経験症例報告会：経験症例報告書に基づいて報告会を行い学生間で意見交換をする。
	OSCE：指定された症例の病態を読み取り、症例の演技する。指定された検査や介助を行う。

臨床実習

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
総合臨床実習Ⅰ(総合Ⅰ)	吉澤利夫　他	☑ 全教員が理学療法士として病院等における臨床経験、実習指導の経験があり、その経験を基に授業を行う。	8単位 / 344時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
2学年までの授業及び評価実習で履修したことを、臨床実習指導者のもとに応用し、知識・技術の整理、確立を図ることを目的としている。内容としては検査・測定を中心とした様々な情報収集から問題点把握、目標設定、治療計画立案及び治療実施が含まれる。それらの結果については報告書にまとめるとともに報告を行う。また理学療法士として必要な態度を身につけることや、社会や医療の中での理学療法士の役割について学ぶことも目標としている。また理学療法部門の管理・運営に必要な基本事項について自分の意見を持ち、さらに医療専門職として責任ある態度・行動がとれることも大切な目標である。実習期間中は、臨床実習施設において実習指導者のもとで、実践を通じて指導してもらいながら、理学療法士としての知識・技術を身につける。	３年次	前期
	【授業形態】	【履修区分】
	実習	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
関連部門から必要な情報を収集できる。必要な検査測定項目を選択できる。 集められた情報・評価結果を記録用紙等に記載できる。 教育者の立ち振る舞いをを理解し、模倣・実施できる。 教育者の検査・評価・治療を理解し、模倣・実施ができる。 評価・治療の変更を理解し模倣・実施ができる。報告ができる。	社会（施設）での実習となるため、身嗜み、言葉使い、規則などが各施設によって異なることを意識し注意をする。実習では学校指定の実習着を使用する。

【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
実習前オリエンテーションで、注意事項を指導する。 8週間施設にて実習を受ける。 実習後OSCEを行う。また、経験症例について報告書をまとめ、報告会を行い学生間で意見交換を行う。	一般的検査方法、動作観察などを復習しておくこと。また病態解釈のための情報収集方法をまとめておくこと。運動療法学を復習しておく。

【成績評価の方法と基準】	【参考書】
下記の割合と実習中の姿勢を総合的に評価する。 OSCE45%、報告書20%、報告会15%、提出物15%、出欠5%	臨床実習の手引き

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

授業内容

	実習前オリエンテーション（学内）：実習の目的、手順、心得、マナー、感染予防、個人情報などの指導をおこなう。また、チェックリスト、ディリーノート、出席表の書き方の指導を行う。 実習期間：8週間の学外実習を実施する。 （課題内容：ディリーノート、チェックリスト、出席表の記入） 訪問リハビリテーション・通所リハビリテーションも可能な限り経験する。
	経験症例報告書の記入：A3用紙に決まった項目を記入する。
	経験症例報告会：経験症例報告書に基づいて報告会を行い学生間で意見交換をする。
	OSCE：指定された症例の病態を読み取り、症例の演技する。
	リスク管理しながら指定された検査や介助を行う。
	臨床前後にOSCEを行う。 ※実習前OSCE

臨床実習

【授業科目名】	【担当教員名】	【実務経験教員による授業】	【単位数/授業時数】
総合臨床実習Ⅱ（総合Ⅱ）	吉澤利夫　他	☑ 全教員が理学療法士として病院等における臨床経験、実習指導の経験があり、その経験を基に授業を行う。	8単位 / 344時間

【授業の概要（内容）と目的】	【履修年次】	【開講学期】
2学年までの授業及び評価実習で履修したことを、臨床実習指導者のもとに応用し、知識・技術の整理、確立を図ることを目的としている。内容としては検査・測定を中心とした様々な情報収集から問題点把握、目標設定、治療計画立案及び治療実施が含まれる。それらの結果については報告書にまとめるとともに報告を行う。また理学療法士として必要な態度を身につけることや、社会や医療の中での理学療法士の役割について学ぶことも目標としている。また理学療法部門の管理・運営に必要な基本事項について自分の意見を持ち、さらに医療専門職として責任ある態度・行動がとれることも大切な目標である。実習期間中は、臨床実習施設において実習指導者のもとで、実践を通じて指導してもらいながら、理学療法士としての知識・技術を身につける。	３年次	前期・後期
	【授業形態】	【履修区分】
	実習	必修

【授業の到達目標】	【履修上の注意事項】
関連部門から必要な情報を収集できる。必要な検査測定項目を選択できる。 集められた情報・評価結果を記録用紙等に記載できる。 教育者の立ち振る舞いをを理解し、模倣・実施できる。 教育者の検査・評価・治療を理解し、模倣・実施ができる。 評価・治療の変更を理解し模倣・実施ができる。報告ができる。	社会（施設）での実習となるため、身嗜み、言葉使い、規則などが各施設によって異なることを意識し注意をする。実習では学校指定の実習着を使用する。

【授業の方法】	【授業時間外学修（予習・復習等）】
実習前オリエンテーションで、注意事項を指導する。 8週間施設にて実習を受ける。 実習後OSCEを行う。また、経験症例について報告書をまとめ、報告会を行い学生間で意見交換を行う。	一般的検査方法、動作観察などを復習しておくこと。また病態解釈のための情報収集方法をまとめておくこと。運動療法学を復習しておく。

【成績評価の方法と基準】	【参考書】
下記の割合と実習中の姿勢を総合的に評価する。 OSCE45%、報告書20%、報告会15%、提出物15%、出欠5%	臨床実習の手引き

【授業計画（各回のテーマ・内容）】

授業内容

	実習前オリエンテーション（学内）：実習の目的、手順、心得、マナー、感染予防、個人情報などの指導をおこなう。また、チェックリスト、ディリーノート、出席表の書き方の指導を行う。 実習期間：8週間の学外実習を実施する。 （課題内容：ディリーノート、チェックリスト、出席表の記入） 訪問リハビリテーション・通所リハビリテーションも可能な限り経験する。
	経験症例報告書の記入：A3用紙に決まった項目を記入する。
	経験症例報告会：経験症例報告書に基づいて報告会を行い学生間で意見交換をする。
	OSCE：指定された症例の病態を読み取り、症例の演技する。
	リスク管理しながら指定された検査や介助を行う。
	臨床前後にOSCEを行う。